えびの市埋蔵文化財調査報告書　第64集

島内地下式横穴墓群Ⅶ

２０２４

宮崎県えびの市教育委員会

えびの市埋蔵文化財調査報告書　第64集　島内地下式横穴墓群Ⅶ　二〇二四　宮崎県えびの市教育委員会

えびの市埋蔵文化財調査報告書　第 64 集

島内地下式横穴墓群Ⅶ

２０２４

宮崎県えびの市教育委員会

序

えびの市は、宮崎県の南西部に位置し、日向・肥後・薩摩・大隅の分岐点にあたる、南九州の要であります。北の九州山地と南の霧島山系に挟まれた狭長な盆地は河岸段丘が発達し、豊富な降雨や湧水、肥沃な氾濫原の存在により、段丘面の殆どが周知の遺跡となっております。３万年前には黒曜石を流通させ、古代には官道も整備され、段丘崖を利用した牧も営まれた重要拠点として栄え、必然的に様々な文化や文物が混合した独特の地域であります。

本市の西部、川内川左岸の低位段丘に立地する島内地下式横穴墓群は、古墳時代中後期の鉄製武具・武器が有機物を伴って数多く出土する遺跡として周知されており、平成２４年９月には出土品の約７割 1,029 点が重要文化財に指定されております。

本書は、令和元年８月以降令和５年６月までに陥没・調査した 174 ～ 179 号墓および、平成２６年度から実施した地中レーダー探査の成果、さらには国指定重要文化財のうち実測図が未報告のものの報告であります。

本書が学術資料としてだけでなく、生涯学習や学校教育の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する理解と認識が深まれば幸いです。

本遺跡の調査にあたり、ご指導・ご協力頂いた諸先生方、調査に対してご理解・ご協力頂いた西都原考古博物館・宮崎県教育庁文化財課および宮崎県埋蔵文化財センターの諸氏、地権者・耕作者の諸氏、発掘作業・整理作業に従事して頂いた作業員の方々に対しまして厚くお礼申し上げます。

令和６年３月

えびの市教育委員会

教育長　永　山　新　一

例　　言

1．本書は、令和元年８月から令和５年６月にかけて陥没・調査した島内地下式横穴墓群 174 ～ 179 号墓、および重要文化財に指定された中の一部４号墓の鉄鏃と鉄剣、５号墓の貝釧、７号墓の鉄鏃と鉄刀の実測図と写真、さらには分布域の東部において、平成 26・28・30 年度に実施した地中レーダー探査の成果の報告書である。

2．出土人骨の実測～取上～分析については、鹿児島女子短期大学の竹中正巳教授に委託し、玉稿を賜り、付篇に掲載した。

3．写真図版のドローンによる航空写真と遺構の写真の大半は鹿児島大学総合研究博物館の橋本達也教授に撮影・ご提供頂き、出土品については牛嶋茂氏に撮影して頂きました。記して感謝申し上げます。

4．島内 174 ～ 179 号地下式横穴墓については、橋本達也教授に三次元画像を作成して頂いたのでここに掲載し、感謝申し上げます。

5．調査の関連資料や出土遺物は、えびの市歴史民俗資料館に保管している。人骨は、全て宮崎県立西都原考古博物館に保管して頂いている。

6．出土遺物は、徳澄が実測し、中野が加筆した。実測図は、全て徳澄がトレースした。本文と表作成および写真図版のトリミング～レイアウトは、濱田が担当した。

7．第３章までの執筆と編集は中野が担当した。

8．当古墳群の出土品 1029 点が重要文化財の指定を受けた際、４・５・７号墓の出土遺物の実測図が未報告であると同時に西都原考古博物館に保管してあることから、加藤徹氏にお願いし、玉稿を頂いたのでここに掲載します。記して感謝申し上げます。

9．地下式横穴墓分布域の東部～東端において西都原考古博物館の機器と調査員を主体に４ヶ年に渡って地中レーダー探査を実施して頂いた成果を公表する機会ができた。そこで、東憲章氏（現在宮崎県埋蔵文化財センター）に報告頂いたのでここに掲載します。記して感謝申し上げます。

凡　　例

1．地下式横穴墓はＳＴとして略している。

2．遺構断面図の閉塞材の断面の斜線は石を、格子目は土塊（主にアカホヤ火山灰）を示す。

調 査 組 織

特別調査員

鹿児島女子短期大学　教授　竹中　正巳

調査主体

えびの市教育委員会　教育長　永山　新一

社会教育課長　領家　修司（令和２年度まで）
　　齋藤　和明（令和３年度から）
補佐兼係長　齋藤　和明（令和２年度）
　　高佐　伸也（令和３年度から）
主任主査　中野　和浩（令和元年度まで）

主任主事　小島　英子（令和３年度まで）
主任技師　中野　和浩（令和２年度から）
技師　税田　脩介（令和２年度から）
作業員　上牟田忠正（平成 27 年度から）
整理作業員　徳澄みどり（令和２年度から）
　　濵田　彩子（令和５年度）

本 文 目 次

第１章　はじめに……1
第２章　遺跡の位置と歴史的景観……1
第３章　島内地下式横穴墓群　発掘調査
　１．はじめに……5
　２．基本的層序……5
　３．ＳＴ -174 ……5
　４．ＳＴ -175 ……5
　５．ＳＴ -176 ……8
　６．ＳＴ -177 ……10
　７．ＳＴ -178 ……13
　８．ＳＴ -179 ……18
　９．まとめ……20
第４章　宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群出土の人骨……23
第５章　島内 174 号～ 179 号地下式横穴墓の三次元計測……29
第６章　島内４号・５号・７号墓出土重要文化財について……43
第７章　えびの市島内地下式横穴墓群の地中レーダー探査……49

挿 図 目 次

第２章

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡位置図‥‥２

第３章

第２図　島内地下式横穴墓群遺構分布図‥ ３・４

第３図　ST-174 遺構実測図 ‥‥‥‥‥‥‥６

第４図　ST-175 遺構実測図 ‥‥‥‥‥‥‥７

第５図　ST-175 出土遺物実測図 ‥‥‥‥‥７

第６図　ST-175 玄室内実測図 ‥‥‥‥‥‥８

第７図　ST-176 遺構実測図 ‥‥‥‥‥‥‥９

第８図　ST-176 出土遺物実測図 ‥‥‥‥ 10

第９図　ST-177 遺構実測図 ‥‥‥‥‥‥ 11

第 10 図　ST-177 出土遺物実測図 ‥‥‥‥ 12

第 11 図　ST-178 遺構実測図 ‥‥‥‥‥‥ 14

第 12 図　ST-178 玄室内実測図 ‥‥‥‥‥ 15

第 13 図　ST-178 出土遺物実測図(1) ‥‥‥ 16

第 14 図　ST-178 出土遺物実測図(2) ‥‥‥ 17

第 15 図　ST-179 遺構実測図 ‥‥‥‥‥‥ 19

第 16 図　島内地下式横穴墓群　遺構タイプ別分布図 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 21

表 目 次

表１　ST-176 出土遺物観察表 ‥‥‥‥‥ 10

表２　ST-178 出土遺物観察表 ‥‥‥‥‥ 13

表３　県指定古墳・昭和８年６月 26 日付公文書要約‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 20

写 真 図 版 目 次

図版１　ST-174　調査地遠景（南から）、調査地近景（南西から）

図版２　ST-174　完掘全景（南東から）、（西から）　玄室北半部

図版３　ST-174　玄室全景（西から）　屍床中央～右（南東）側の赤色は土中の鉄分，中央左寄りに歯と赤色顔料、崩壊歯と赤色顔料（南から）

図版４　ST-174　竪坑埋土と土塊閉塞状態（南東から）、土塊閉塞状態（南東から）

図版５　ST-175　完掘全景（西から）、（東から）

図版６　ST-175　玄室内（北から）、２・３号人骨と羨門板石閉塞（南から）

図版７　ST-175　１・２号人骨　上半身（西から）、東裾部～東壁　掘削痕（西から）

図版８　ST-175　３号人骨頭部と西壁掘削痕（東から）、１・２号人骨下半身と３号人骨上半身（東から）

図版９　ST-175　２号人骨頭骨下の刀子と貼床確認サブトレンチ（西から）、刀子　出土状態（西から）

図版 10　ST-175　羨門板石閉塞，貼床確認サブトレンチ（南から）、羨門板石閉塞状態（南から）

図版 11　ST-176　完掘全景（東から）、（西から）

図版 12　ST-176　玄室　北中部　赤色顔料の広がり（南から）、接写、１号人骨頭部と刀子（北東から）、接写

図版 13　ST-176　東半部　刀子３点　出土状態（北西から）（左下から奥へ№４・３・２）、羨道土塊閉塞状態（北から）

図版 14　ST-177　完掘全景（北東から）、１号人骨と大刀，左裾部（西壁）～羨門板石閉塞状態（北東から）

図版 15　ST-177　１号人骨と副葬品（北東から）、俯瞰

図版 16　ST-177　１号人骨　上半身（北から）、推定第２被葬者の赤色顔料と副葬品の刀子（南東から）

図版 17　ST-177　羨門板石閉塞状態（北から）、貼床確認サブトレンチ　中央付近

図版 18　ST-178　完掘全景（北から）、俯瞰

図版 19　ST-178　１・２号人骨と副葬品、２号人骨上半身とその周辺（北から）

図版 20　ST-178　１・２号人骨　下肢とその周辺（北から）、１・２号人骨　頭部（北から）

図版 21　ST-178　筈　出土状態（西から）、２号人骨　頭部（北東から）

図版 22　ST-178　３号人骨の赤色顔料と仕切り土手の上に刀子（東から）、２号人骨右足部の鉄鏃　出土状態、大刀に接する刀子３本　出土状態

図版 23　ST-178　右裾部（北西から）、羨門板石閉塞状態（北から）

図版 24　ST-179　耕耘機による破壊，通報時の状況（南から）、接写（南から）、２ｍ四方の表土除去（北から）、接写、竪坑　検出状態（北から）

図版 25　ST-179　竪坑　検出状態（西から）板石は 25cmほど東へズレて落ちかかっている、竪坑断面（西から）、北側　接写、南側　接写

図版 26　ST-179　閉塞板石２枚と目貼り粘土（東から）、最下板石と目貼り粘土（西から）、目貼り粘土検出状態（西から）、（北から）

図版 27　ST-179　大腿骨と奥壁～北西壁、東裾部の白色粘土～天井の掘削痕、竪坑　開口部　掘削痕、羨道天井掘削痕

図版 28　ST-179　玄室　西半、東半

図版 29　ST-179　大腿骨出土状態（西から）、１・２号人骨の大腿骨

図版 30　ST-175　出土　刀子、ST-176 出土　刀子、ST-177 出土　刀子

図版 31　ST-177　出土　大刀

図版 32　ST-178　出土遺物（１）

図版 33　ST-178　出土遺物（２）

図版 34　ST-178　２号人骨右足除去後　鉄鏃出土状態、ST-178　鉄鏃（９）布痕、ST-176　刀子（３）ハエ囲踊殻

第１章　はじめに

島内地下式横穴墓群は、地下式横穴墓群 120 ヶ所を代表する墳墓群の一つであり、平成 24 年９月６日付けで、出土遺物のうち保存状態の良好なもの 1029 点が国の重要文化財に指定された。これらは地鉄のみならず、木・皮革・布や組紐・鹿角・貝製品など様々な装具・有機物が銹着・遺存し、武器・武具の製作技術研究には不可欠の遺物群として周知されている。また、熟年女性人骨の上顎前歯部舌側面磨耗（LSAMAT）と頭上前方運搬痕の他、糞石３例、鉄器に銹着したニクバエの囲蛹殻[1]など、全国的にみても希少性の高い資料が出土しており、古墳時代像を探る一助になる。

173 号墓まではすでに報告書を刊行しているが[2]、大型耕耘機の多用と深耕により、令和元年度に１基、２年度に３基、３年度に１基、５年度に１基を調査した。

第２章　　遺跡の位置と歴史的景観（第１図）

島内地下式横穴墓群は、えびの市大字島内字平松・杉ノ原に所在する。本市の西部、盆地中央を西流する川内川の左岸、標高 233 ～ 235 m、氾濫原との比高 10 mほどの低位段丘に立地する。墳墓群は、東西 650m・南北 300m 強、約 12ha に分布し、北端の 1.5ha ほどは、昭和 46 年（1971）、地表下２mほどで露出する砂利を採取したために削平されている。

周囲は、島内遺跡（２）・中浦遺跡（４）・大溝原遺跡（３）の縄文時代以降の広大な遺跡群が続くと想定されるが、半径 1.5km 以内の調査事例は無い。

川内川左岸には、２～３km 間隔で、西から島内・灰塚・小木原・建山と大規模な墳墓群が立地し、小規模な遠目塚・杉水流（すぎつる）の墳墓群が続く。右岸の大規模墳墓群は１ヶ所（苧畑（おばたけ））しか無いが、小型形式の地下式横穴墓を内小野遺跡（28）で１基[3]、天神免遺跡（20）で 27 基[4]、岡松遺跡（21）で２基[5]検出している。このうち、灰塚・小木原・苧畑においては板石積石棺墓も混在する。対岸の２km 北には、弥生時代中期末～古墳時代中期の竪穴建物 130（推定総数 300 ～ 400）棟を検出した内小野遺跡が立地し、当墳墓群を造営した集団の主要居住地である可能性が高く、壷片を転用した溶鉄の取瓶や高坏転用鞴の羽口のほか、71 号竪穴建物からは畿内産の初期須恵器大甕が、130 号竪穴建物からは小型の鉄鋌が出土している。その東には、５～６世紀代の竪穴建物 41 棟・バリの付いた鉄斧や高坏転用鞴の羽口を検出した妙見遺跡[6]（32）が、３km 西には、弥生時代後期～古墳時代後期の竪穴建物 200 棟余り・高坏転用鞴の羽口や鉄床石、鉄や錫を検出した転用土器片などが出土した天神免遺跡が、その南東には竪穴建物 28 棟を検出した岡松遺跡が立地する。

段丘下の氾濫原は遺跡が少ないが、徳永牟田遺跡（５）では弥生時代後期の壷や甕数 10 個が潰れた状態で発見され[7]、自然堤防や微高地には遺跡が包蔵していることを留意する必要がある。中世には、左岸段丘の突出部や右岸丘陵の末端部に山城が連立し、肥沃な盆地と交通の要衝の覇権が争われた。三吉城西隣の独立小丘陵頂部（９）には、経塚３基があり、地権者によってうち１基から軽石製外容器が掘り出されている。

註

⑴ 『ハエのさなぎから探る古代の葬式　パンフレット』2023、出雲弥生の森博物館

⑵ えびの市教育委員会『島内地下式横穴墓群』2001、同『島内地下式横穴墓群Ⅲ・岡松遺跡』2009、同『島内地下式横穴墓群Ⅱ』2010、同『島内地下式横穴墓群Ⅳ』2012、同『島内地下式横穴墓群Ⅴ・灰塚地下式横穴墓群』2017

竹中正巳・大西智和「宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群 69･70･71･72･73･74･75 号墓発掘調査報告」『人類史研究』第 11 号　人類史研究会　1999

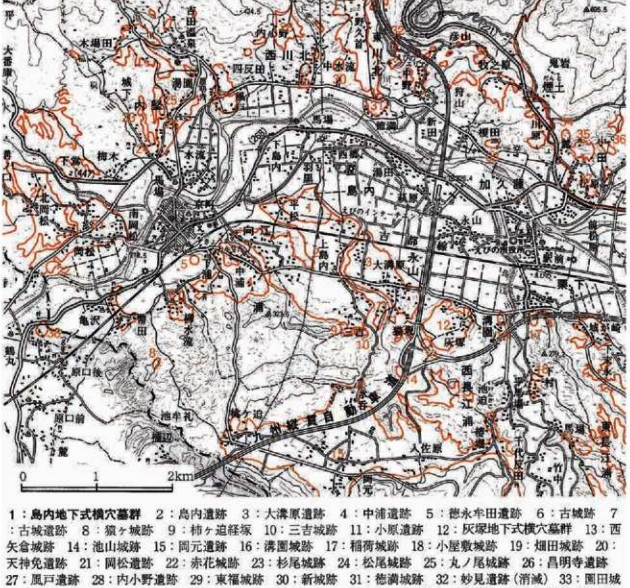
竹中正巳・大西智和「宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群 76･77･78･79･87･88･89･90･91 号墓発掘調査概報」『人類史研究』第 12 号　人類史研究会　2000

⑶ えびの市教育委員会『内小野遺跡』2000

⑷・⑸ えびの市教育委員会『北岡松地区遺跡群』2010

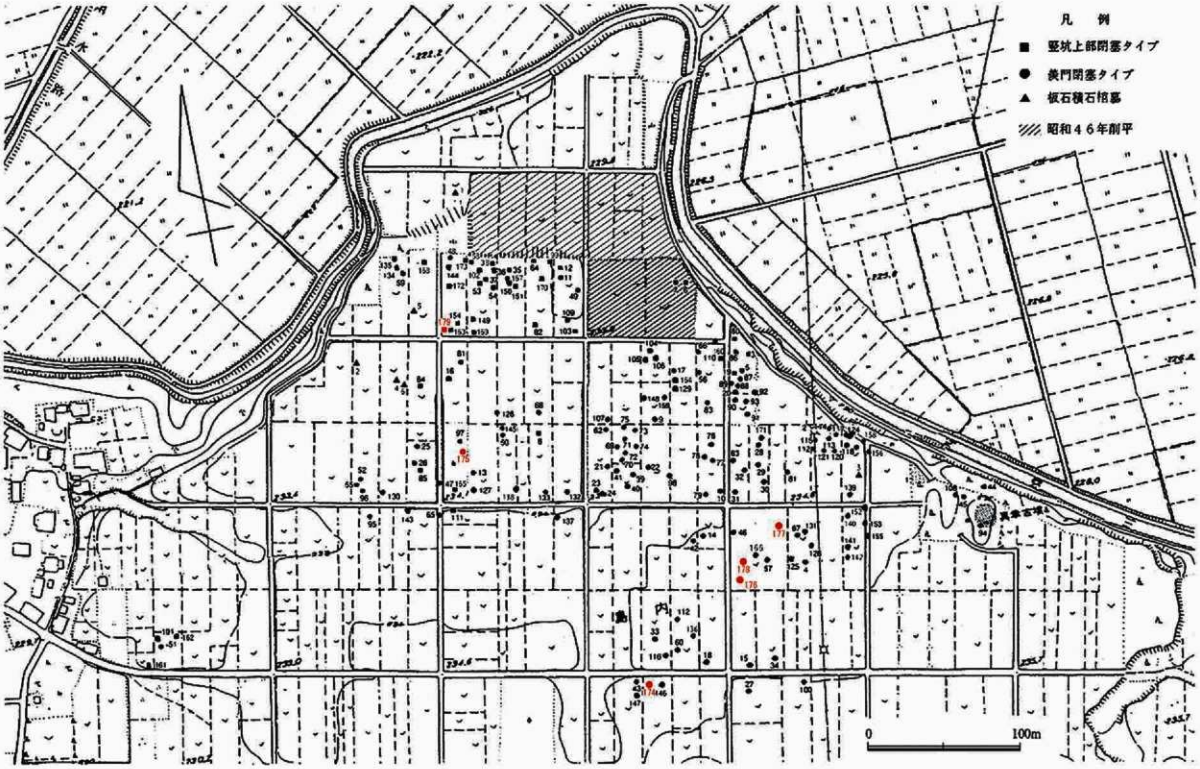
⑹ 宮崎県教育委員会『野久首遺跡・平原遺跡・妙見遺跡』1994

⑺ 未発表である。



1：島内地下式横穴墓群　2：島内遺跡　3：大溝原遺跡　4：中浦遺跡　5：穂永牟田遺跡　6：古城跡　7：古城遺跡　8：狼ヶ城跡　9：柿ヶ迫経塚　10：三吉城跡　11：小原遺跡　12：灰塚地下式横穴墓群　13：西矢倉城跡　14：池山城跡　15：岡元遺跡　16：溝園城跡　17：稲荷城跡　18：小屋敷城跡　19：畑田城跡　20：天神免遺跡　21：岡松遺跡　22：赤花城跡　23：杉尾城跡　24：松尾城跡　25：丸ノ尾城跡　26：昌明寺遺跡　27：風戸遺跡　28：内小野遺跡　29：東福城跡　30：新城跡　31：穂満城跡　32：妙見遺跡（消滅）　33：園田城跡（消滅）　34：浄慶城跡　35：加久藤城跡　36：新城跡　37：小城跡　38：鵜丸・馬場地下式横穴墓群（湯水町）

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡位置図（１：50,000）



第２図　島内地下式横穴墓群　遺構分布図

第３章　島内地下式横穴墓群　発掘調査

１．はじめに

今回報告する墳墓群は、令和元年８月以降、耕耘による陥没・通報を受けて調査した地下式横穴墓６基である。

２．基本的層序

層序は上から、Ⅰ層：畑耕作土、Ⅱ層：旧耕作土・床土・客土、Ⅲ層：黒灰～黒褐色土、Ⅳ層：アカホヤ火山灰（ＢＰ７,３００）、Ⅴ層：暗茶褐色＋黒褐色土、Ⅵ層：淡黒褐色土、Ⅶ層：淡黄褐色～淡茶褐色微砂質土～細砂質土、Ⅷ層：段丘砂礫層（ＢＰ１６,７００）に分別した。Ⅲ層は本来はａ・ｂに分かれ、厚さ10cm程のｂ層上面が古墳時代の遺構面であるが、開墾により、遺存していない地点が多い。Ⅳ層はａ・ｂに分け、ａ層は淡黄褐色の２次堆積層で、遺跡によっては縄文時代前期～古墳時代の遺物包含層になっている。ｂ層はアカホヤ火山灰の本体で、最下部２～３cmは直径２～３mmの軽石粒が主体である。Ⅶ・Ⅷ層には、小林軽石（ＢＰ１６,７００、黄白色～黄橙色降下軽石）を含む。Ⅷ層は、数10ｍ間隔で起伏し、地形の原型を形成している。

３．ＳＴ-174（第３図）

分布域の中央南端付近、羨門土塊閉塞タイプ分布域の南東部に位置し、主軸を南東にとる。大型耕耘機による深耕・加重によって玄室の天井全てが崩落した。Ⅶ～Ⅷ層が軟質であり、壁面の殆ども崩れている。竪坑は未調査であり、規模や追葬坑等の詳細は不明である。

羨道は、幅1.0m、高さ0.7mを測り、Ⅶ層塊を主とする土で厚さ20cmほど埋めた上にⅣ層塊で塞がれている。玄室は、平入り両裾楕円形を呈し、幅1.7ｍ・奥行1.07ｍを測る。最大幅は、屍床上0.30ｍで2.10ｍを測り、高さは0.9～1.0ｍと推定される。北東部に赤色顔料が２ヶ所認められ、羨道寄りの方には崩壊した歯が遺存しており、１号人骨として取り上げているが、被葬者は２体と推定される。副葬品は無い。

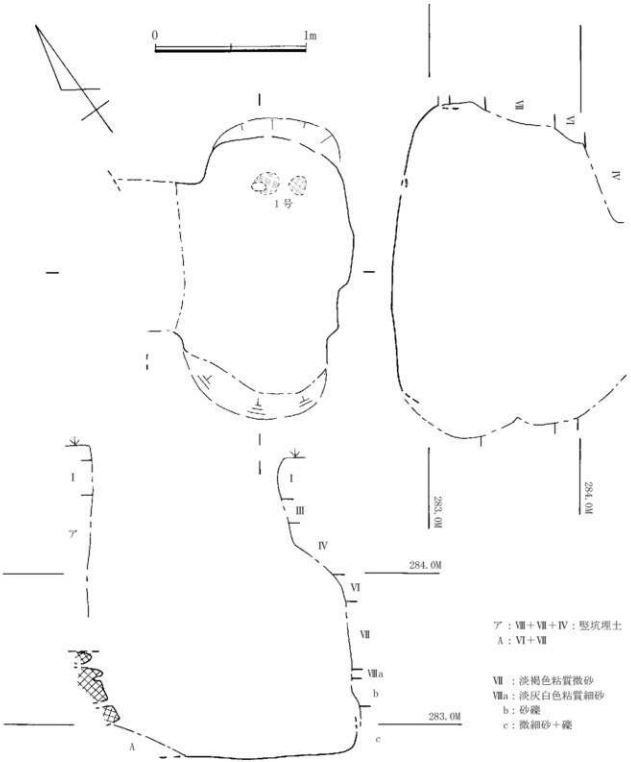
南東方向に墳丘を共有する主体があると推定され、東頭位の意識によって北東頭位で埋葬されたと思われる。

４．ＳＴ-175（第４～６図）

分布域の中央付近に位置し、主軸を南にとる。玄室の天井は殆ど崩落し、竪坑は未調査である。

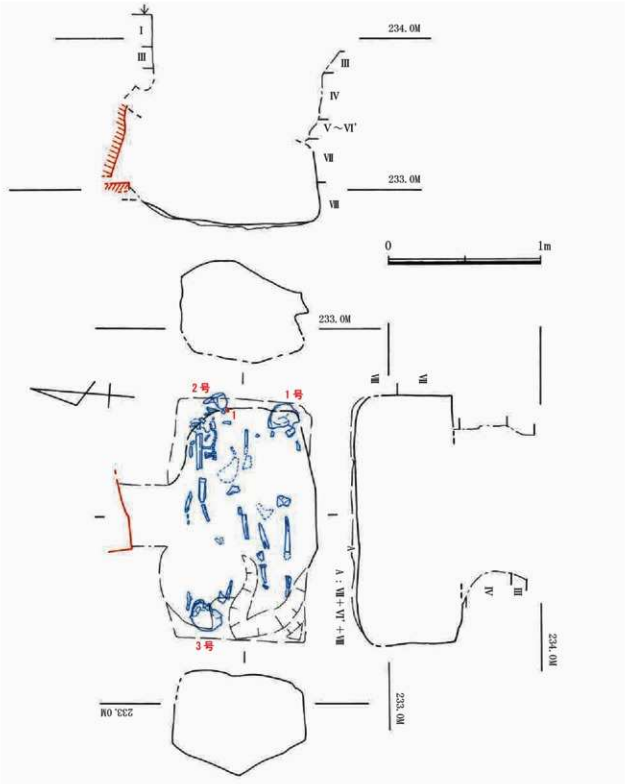
羨道は、幅0.40ｍ・長さ0.40ｍ・高さ0.76ｍを測る。底には厚さ５cmほど土を埋めた上に板石を敷き、その上に閉塞石を立てた羨門板石閉塞である。

玄室は平入り両裾で18cm下がり、屍床面は楕円形を呈し、幅1.41ｍであるが、５cm上位では幅1.64ｍ・奥行0.90ｍの長方形を呈する。天井は切妻屋根形であるが、東側の整形が歪つである。高さは0.65ｍである。屍床には厚さ２～５cmの貼床が施され、南西部は一段低くなっている。被

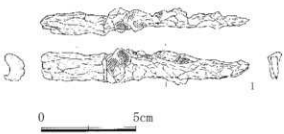


第３図　ST-174　遺構実測図　　網目は赤色顔料

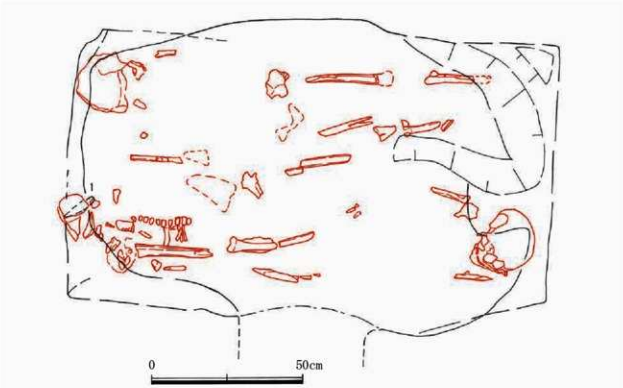
葬者は３体で、１・２号人骨は東頭位、３号人骨は西頭位である。１号人骨は熟年の女性で、頭骨以外の上半身の依存が僅かである。副葬品は無い。２号人骨は壮年の女性で、諸々の部位が 50％ほど遺存する。横転した頭骨の下には切先西の刀子１が置かれている。３号人骨は壮年後期 30 代の女性で、頭骨以外の上半身の遺存が悪い。副葬品は無い。刀子（第６図）は鹿角柄で、現存長 110 ㎜、刃部の長さ 75 ㎜・最大幅 14 ㎜・厚さ３㎜を測る。柄部の長さは 35 ㎜、幅は 14 ㎜以上・厚さ 11 ㎜以上であり、刃部全面に布が遺存し、関部は折り重なっている。



第４図　ST-175　遺構実測図



第５図　ST-175　出土遺物実測図



第６図　ST-175　玄室内実測図

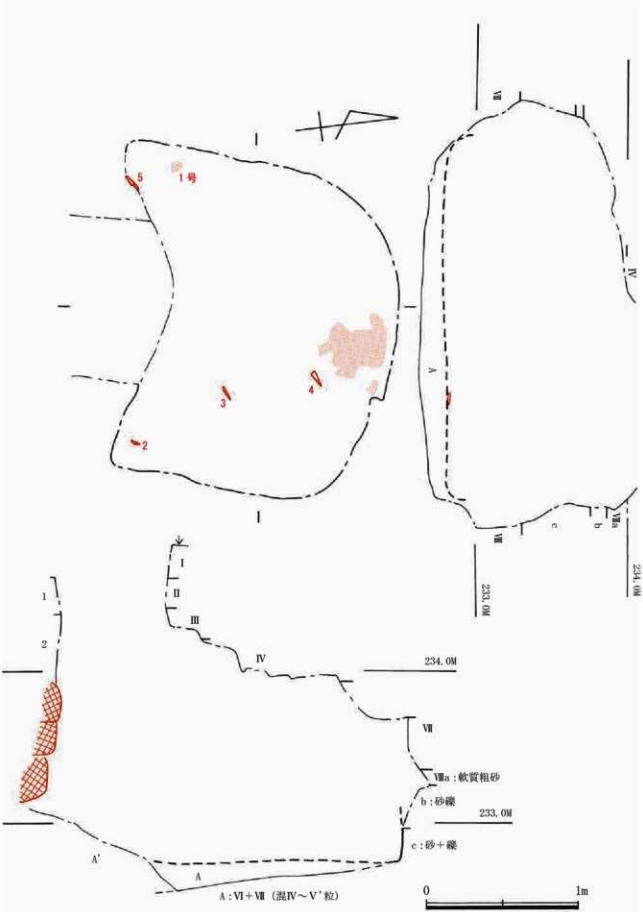
５．**ＳＴ-176**（第７図）

分布域の南東部、羨門土塊閉塞タイプの分布域の中心付近に位置する。羨門～玄室の天井全てが崩落している。主軸は北北東で、竪穴は未調査のため詳細不明である。

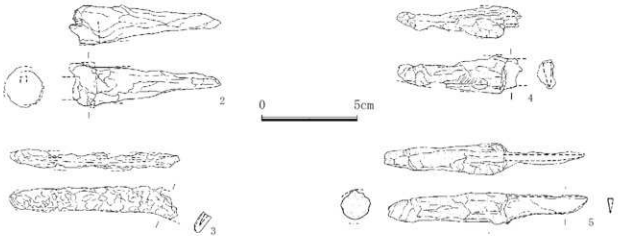
羨道の幅は 1.01 m、高さは 1.1 m前後と推定される。下半はⅥ～Ⅶ層主体の土で埋められ、縦横 40 ～ 50 ㎝のⅣ層塊で塞がれている。

玄室は、平入り両裾の半円半方形（略Ｄ字形）を呈し、両裾部が突出している。幅 2.2 m、奥行 1.4 ～ 1.8 mを測り、高さは不明である。厚さ８～ 18 ㎝の貼床土は軟質で、刀子２・３が出土した時は天井崩落時の風圧で屍床よりも上に移動したものと思い込み、当初掘削面まで掘り下げた。結果的に、全ての出土遺物が 13 ～ 20 ㎝浮いた状態になった。人骨と言えるのは西南部で検出した歯と赤色顔料のみであるが、東南部の２ヶ所に刀子各１（第８図－２・３）、北壁沿い中央部に長さ 30 ～ 50 ㎝の不整形範囲の赤色顔料と刀子１（４）を検出した。刀子と赤色顔料の位置から、被葬者は３～４体と思われる。

１号人骨に伴う刀子（５）以外の３点の欠損部は、崩落土排出時に折損・排棄してしまったようであり、欠損品が副葬されたわけではない。２は、刃部欠失の木柄刀子である。３は柄部欠失の刀子で、切先部に革鞘が遺存し、ハエ囲踊殻小片が複数銹着する。４は、刃部欠失の鹿角柄刀子で、中位に糸巻が遺存する。５は鹿角柄刀子で、全長 105 ㎜を測り、刃部に革鞘が遺存する。



第７図　ST-176　遺構実測図　　網目は赤色顔料



第８図　ST-176　出土遺物実測図

表１　ST-176　出土遺物観察表

No	種類	法量（㎜）・（現存）・（推定）							備　　考
		全長	刃部			柄部			
			長さ	最大幅	厚さ	長さ	幅・径	厚さ	
2	刀子	(80)	—	—	—	(64)	(20)	(18)	木柄
3	刀子	(89)	(89)	(15)	—	—	—	—	切先部革鞘・ハエ圓蛹殻小片複数
4	刀子	(66)	(7)	16	5	(57)	21	—	鹿角柄、中位に糸巻
5	刀子	(105)	42	14	3	(63)	(19)	(16)	刃部に革鞘

６．ＳＴ－177（第９図）

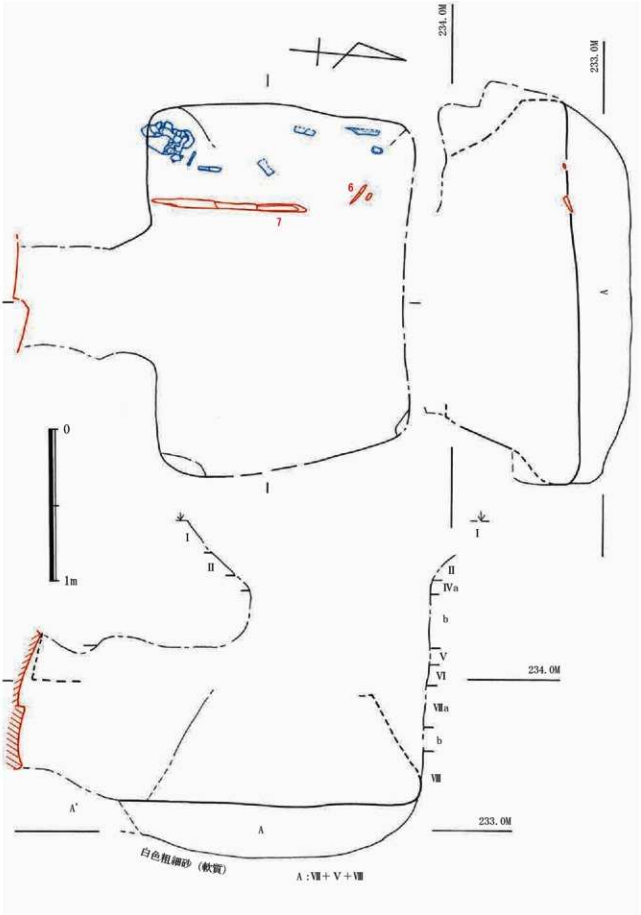
176 号墓から約 50m 北東に位置し、羨道～玄室の天井全てが崩落した。主軸は北で、羨門板石閉塞である。竪坑は、未調査である。

羨道は、長さ 0.9m 内外、幅 0.64m を測り、高さ 0.9m 内外と推定される。厚さ 30 ～ 40 ㎝埋めた上を板石で塞いでいる。

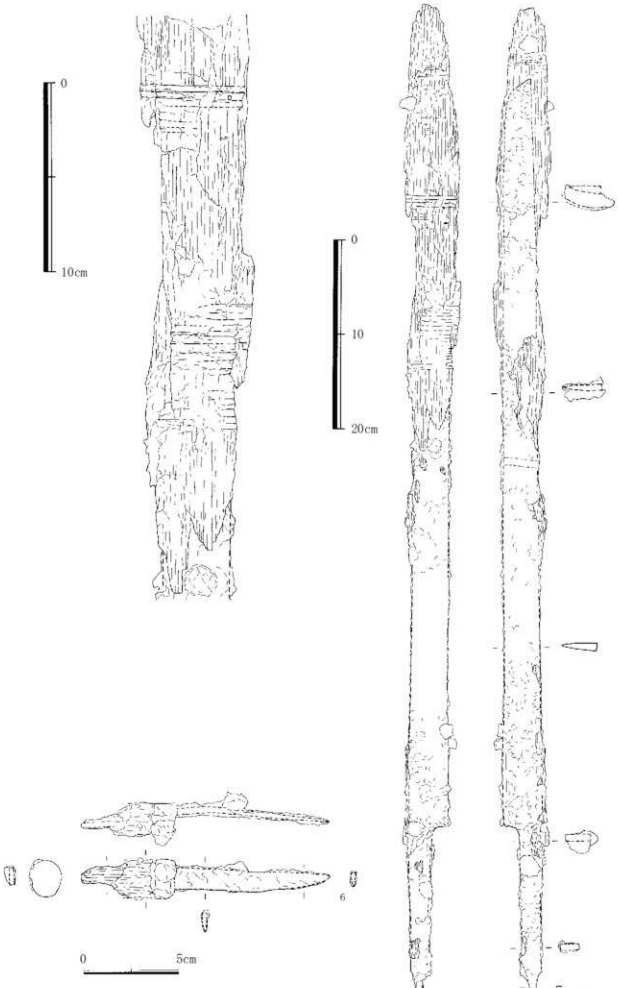
玄室は平入り両裾の隅丸長方形～台形を呈し、幅 1.94 ～ 2.40m、奥行 1.65m を測り、高さ 0.86m 前後と推定される。天井は寄棟家型を呈するが、廂の有無は不明である。屍床には最厚 0.40m の貼床があり、初期掘削面は軟質の白色粗細砂である。被葬者は１体で、西側に南頭位・熟年の男性である。赤色顔料が塗布され自然崩壊している頭骨以外の骨は断片程度であるが、屍床部は黒色物質が広がっている。右側には、切先北の大刀（第 10 図－７）が、足元には切先南東の刀子（６）と崩壊朱玉状の赤色顔料がある（推定第２被葬者）。

大刀は、鞘を含む全長は 1050 ㎜、刀身は 972 ㎜、刃部長 787 ㎜、最大幅 41 ㎜、厚さ９㎜、把は長さ 185 ㎜・幅 23 ㎜・厚さ７㎜で、少量の木質が銹着する。鞘には断面方形～台形の幅３～４㎜・厚さ２～ 2.5 ㎜の革もしくは植物質の紐で巻かれている。糸束や組紐ではなく、出土後も縮まないので革の可能性も低い。鞘先端から 21 ㎝の所に２㎜角の孔がある。又、48 ㎝の所には幅８㎜の異質部分がある（有機質の吊下か）。刀子は、木柄で全長 131 ㎜、刃部長 81 ㎜、最大幅 11 ㎜、厚さ３㎜を測る。幅 11 ㎜の鉄製鏾と径 17 ～ 19 ㎜の木柄が遺存する。

大刀と並行しない刀子の向きと赤色顔料の存在は幼小児の被葬者が想定される。



第９図　ST-177　遺構実測図



第 10 図　ST-177　出土遺物実測図

7．ＳＴ-178（第11図）

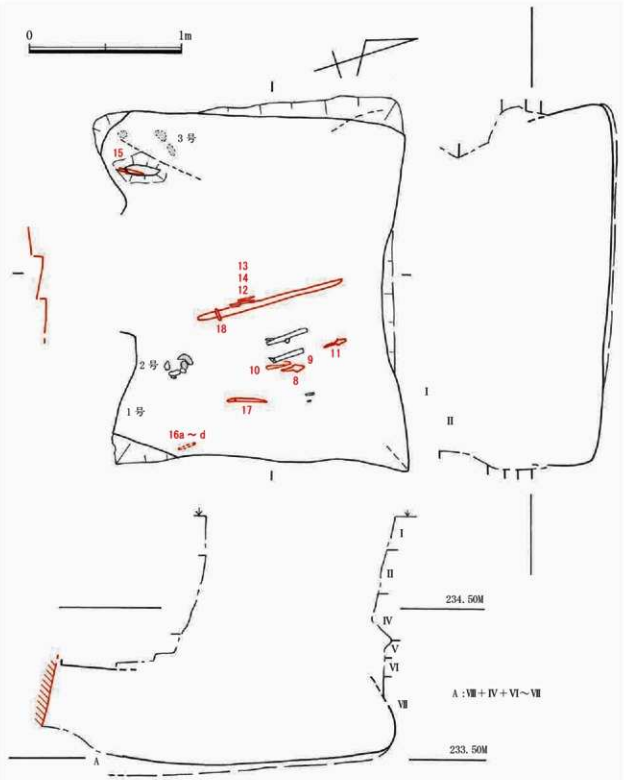
176号墓の北東15mほどに位置し、玄室の天井全てが崩落した。主軸は北北東で、羨門板石閉塞タイプである。竪坑は、未調査である。

羨道は、長さ0.6m・幅0.7m・高さ0.7mを測る。底面から30cmほどを埋めた上を板石で閉塞している。玄室は、平入り両裾の長方形で、西南角と東南角は少し突出する。幅2.16m、奥行1.68mを測り、天井は寄棟家型と思われる。被葬者は南頭位の３体で、東側に２体、西側に１体である。１号人骨は、赤色顔料を塗布された頭骨片と下肢骨の一部のみ遺存し、頭部右横に両頭金具入り箭付近（第13図-16a～d）、足先に弓片の様な木質、胸部～腹部に切先北の小刀（17）、左足部に切先北の鉄鏃２（９・10）が副葬されている。９は、人骨取上後に検出した。２号人骨は、赤色顔料を頭部に塗布された熟年で、他の部位は両大腿骨のみであるが、大刀の中央部横に骨片が動かされている。右大腿骨部の切先北の鉄鏃１（８）と足先の鉄鏃１（11）および左側の大刀（18）と刀子３（12～14）が副葬されている。刀子は大・中・小の３種類で、切先も揃っていない。３号人骨は、頭部の赤色顔料３ヶ所のみで、右横には、上面の幅7cm・長さ23cm、高さ４～５cmの仕切り土手があり、上面に切先北の刀子（15）が置かれている。

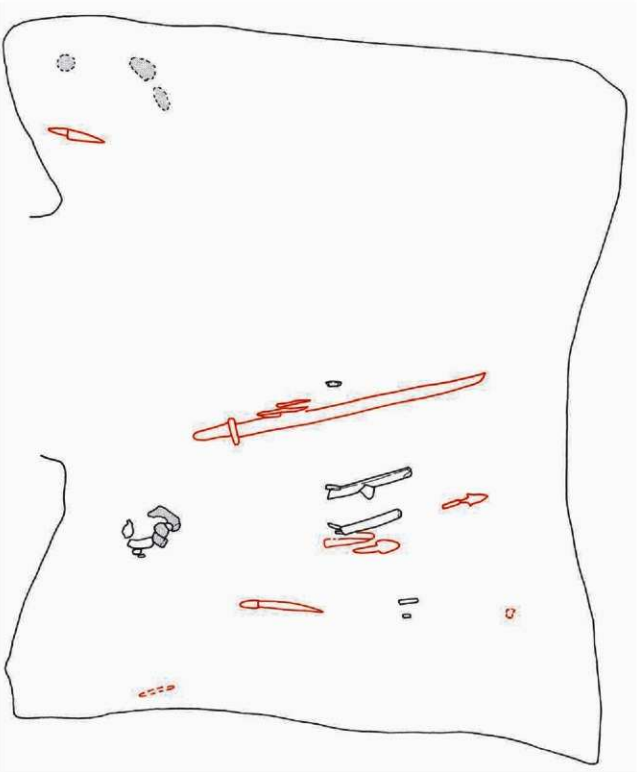
鉄鏃（矢）４本の刃部形態は全て異なり、９・10と８・10は帰属が入れ替わる可能性もある。箭は茶褐色繊維質に劣化し、取上時に両頭金具状の鉄製品４点になった。鐔付大刀の把は形状を良く保ち、把間は幅３～６mmの革もしくは植物質の紐で巻かれている。鞘口金具は幅18mmの鉄製で、佩裏の鞘口から12cmの所には幅２cmの黒褐色部分がある。無窓鐔は、長径76mm・短径68mmである。

表２　ST-178出土遺物観察表

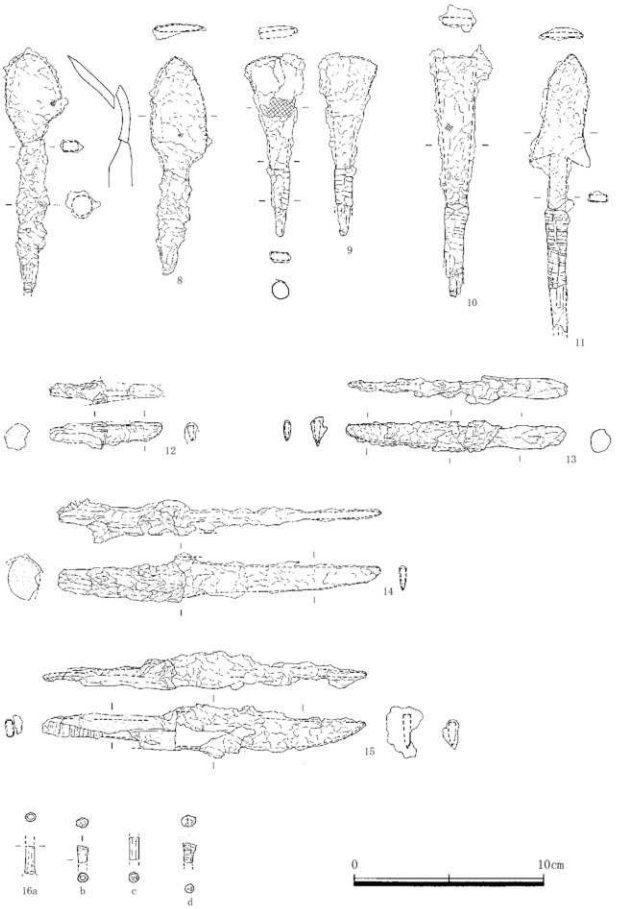
No	種類	法量（mm）・（現存）・（推定）				備　考
		全長	刃部			
			長さ	最大幅	厚さ	
8	鉄鏃	(135)	49	29	3	左右非対称、A面に布痕、刃部銹曲
9	鉄鏃	94	5	27	(3)	A面頭部に布痕、口巻きは８周・20mm以上
10	鉄鏃	126	—	22	—	両面頭部に布痕、口巻きは40mm
11	鉄鏃	(147)	58	32	—	茎基部欠、口巻きは42mm
12	刀子	(59)	31	9	4	鹿角柄、革鞘
13	刀子	(116)	73	12	3	鹿角柄、革鞘
14	刀子	(170)	102	18	3	鹿角柄、革鞘
15	刀子	(170)	100	19	3	鹿角柄、木製鞘か、茎に糸巻
16a	両頭金具か	(15)	径５			
16b	両頭金具か	(9)	径５			
16c	両頭金具か	(12)	径５			
16d	両頭金具か	(10)	径５			
17	小刀	270	212	20	5	鹿角柄、目釘穴１、木質鞘
18	大刀	1002	814	38	9	無窓鐔付



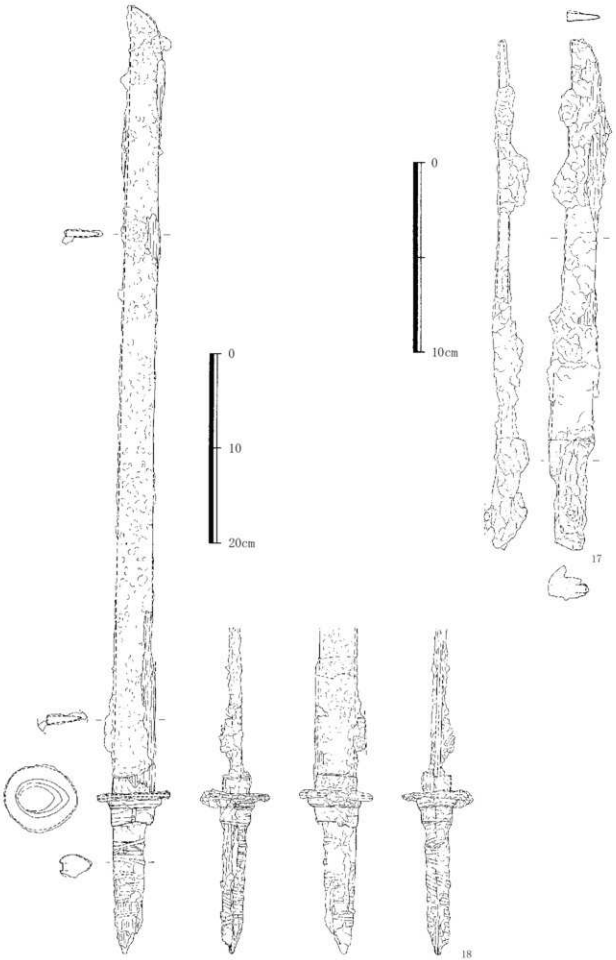
第 11 図　ST-178　遺構実測図



第 12 図　ST-178　玄室内　実測図　　網目は赤色顔料



第 13 図　ST-178　出土遺物実測図（1）



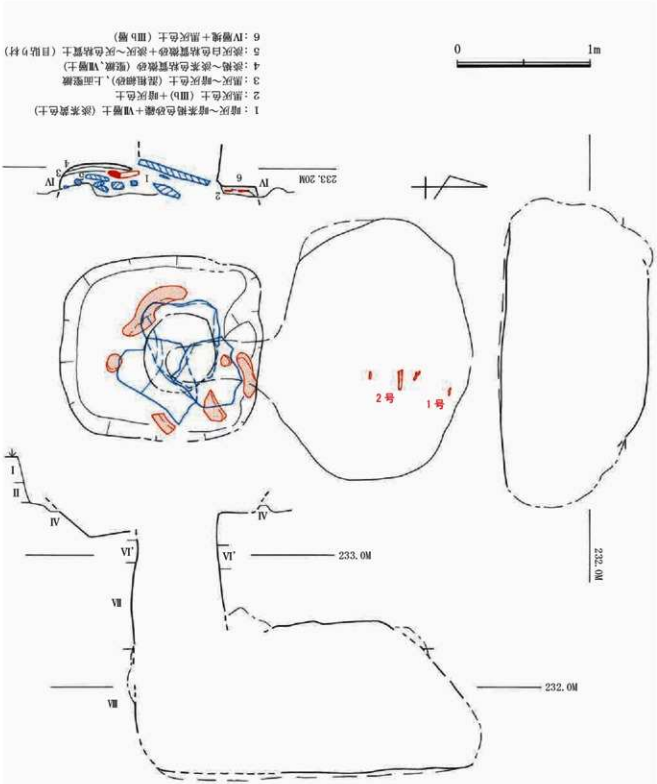
第 14 図　ST-178　出土遺物実測図（2）

８．ＳＴ－179（第 15 図）

分布域の北西部に位置し、耕耘機による深耕によって、竪坑上部閉塞の板石３枚のうちの最上・最小の板石が垂直に持ち上げられ、下の２枚も東へ動き、竪坑が半分見える状況で通報が来た。現地では、下２枚の板石を現状で残して竪坑調査～実測を行ったが、本報告では、目貼りの白色粘土の形状を生かして、おおよその位置に復元して図化した。主軸はほぼ真北である。

竪坑は、１段目上部を 20 ㎝程度攪乱されており、東西 1.40 ｍ・南北 1.50 ｍが遺存する。現状での深さは北側で８㎝、南側で 26 ㎝を測り、傾斜が付く。中心やや北側に羨門が開口し、最下閉塞石（長さ 77 ㎝、幅 61 ㎝、厚さ４～5.5 ㎝）の北西縁部は２～３㎝の段差に削られ、南西縁には厚さ２～４㎝の白色粘土の目貼りがある。２枚目の板石（長さ 73 ㎝・幅 49 ㎝・厚さ４～６㎝）の北東部と東部、南部にも目貼りがある。最上最小の板石（長さ 51 ㎝・幅 54 ㎝・厚さ２～５㎝）の北縁にも目貼りがある。竪坑南側の埋土最下の４層はⅦ層土が堅く締まっている。粗細砂を含む黒灰～暗灰色土３層上面も堅緻で、その上に白色粘土の目貼りが載る。１－２層の境は攪乱されているため、追葬坑の有無は不明である。開口部は長径 62 ㎝・短径 54 ㎝を測り、ほぼ垂直に掘削されている。遺構検出面から 2.04 ｍでⅦ層主体土の硬化面になったが、初期掘削底面まで掘り下げた。底面の平坦部は幅 28 ㎝ほどしか無い。

玄室は、平入り両裾楕円形で、幅 1.97 ｍ・奥行 1.44 ｍ・高さ 1.14 ｍを測る。天井はドーム型で、西側は崩落し、北半分はⅦ層主体土が流入していた。屍床上 94 ㎝までは軟質の砂礫層であることから、原面を保っていない。被葬者は２体で、西頭位の大腿骨のみ遺存していた。２体とも成人かどうかは不明である。なお、２号人骨大腿骨と 10 ㎝程離れて長さ 12 ㎝程の続きが、厚さ１㎜弱の薄皮状に形状を保っていたが、流入土砂除去の際に排出してしまっている。赤色顔料や副葬品は皆無である。屍床は、Ⅶ層土が３～４㎝貼床として施されている。右羨道部の下部礫層内に幅 40 ㎝程、厚さ 10 ㎝程の白色粘土層が堆積しており、閉塞石の目貼りの素材であろうと思われた。



第 15 図　ST-179　遺構実測図　　網目・塗り潰しは目貼り粘質土、板石の平面は復元推定位置・断面は攪乱された状態

9．まとめ

地下式横穴墓の主軸は北向きが大半を占めるが、174 号～ 179 号墓のうち、174・175 号墓のように主軸が異方向のものは、直径５～ 10m の墳丘を共有（寄生）する血縁者と推定される。

174・176 ～ 179 号墓の人骨の遺存度が悪いのはⅦ～Ⅷ層が軟弱で保水性が高いことが要因と考えられる。特に羨門土塊閉塞タイプ分布域の南半分ほどが該当する。

５世紀中葉以降、羨門閉塞タイプに一新され、玄室は平入り長方形・寄せ棟タイプが主流となり、被葬者は４～５体となり（兄弟が増えて人口が急増している）、武器・武具も大量に供与される。竪坑上部閉塞タイプの中では最大級と確認された 179 号墓は、大型化する羨門閉塞タイプ直前の時期に想定したい。

明治 38 年に甲冑などが出土（直径 15m ほどの円墳で、唯一地上に埋葬施設（横穴式石室）を有する１号墓）して以来、今日までの確認・調査した遺構は、地下式横穴墓 178 基、板石積石室墓６基、馬埋葬墓２基などがあり、各々の分布域がわかってきた（第 16 図）。中期主体の板石積石棺墓は、段丘の北西縁に竪坑上部閉塞タイプ地下式横穴墓群分布域と重複して分布し、現在５基（１・２・４～６号）を確認している。ただし、３号墓だけは北東部の甲冑出土エリア内・139 号地下式横穴墓の北に占地し、横口を有し奥壁の板石が大きい竪穴系横口式石室との折衷タイプであり、半径９m のエリアをもつ特別な遺構である。昭和８年（1933）に指定された県指定古墳 12 基（表３）は、農地解放後に次々と削失していき、圃場の地割も変わったことから、１号墳以外の所在地は不詳となった。将来的には、周溝等を確認する作業が必要である。１号墓（直径約 15 m）[1] は石室の残骸である石材が２個露出し、墳丘の一部も残存しているにもかかわらず未指定のままである。

地中レーダー探査によって、地下式横穴墓から甲冑が出土している約２ha のエリアの遺構分布と、県指定１号墳（直径約 23m）の主体部は主軸を西南西にとる横穴式石室の可能性が高いことが判明し、少なくとも、直径約 15m 以上の１・４・５号墳および１号墓の４基は最上位クラスでヤマト政権とのかかわりが深い墳墓であり、直径９～ 11m の２・３・７・８・10 ～ 12 号墳は地元豪族の上層階層の墳丘であろうと想定したい。近年調査した 139 号墓も玄室北側に直径 10m ほどの無遺構エリアがあり、墳丘が想定できる。

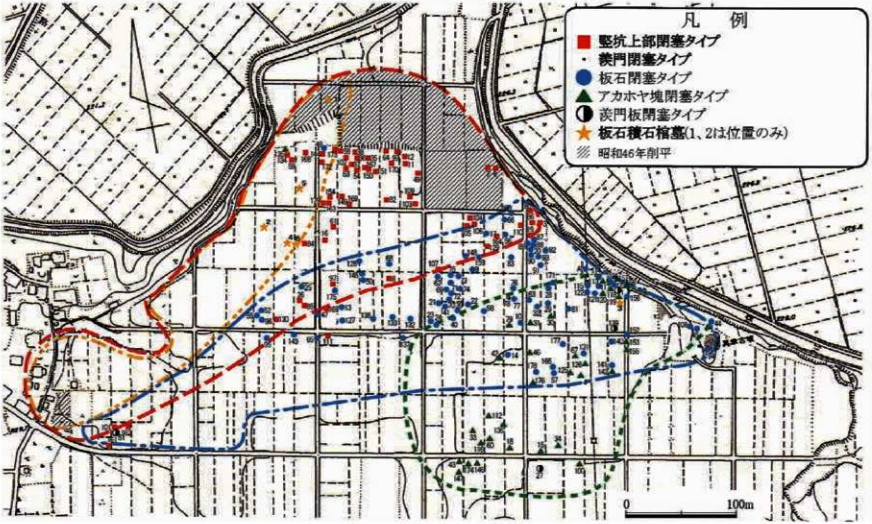
地中レーダー探査結果の検証試掘作業および探査の継続については諸々の事情により先送りになってしまったが、竪坑の調査も含めた総合的な調査は将来に委ねられる。

表３　県指定古墳　昭和８年６月 26 日付公文書　要約

号墳	規模（m）		備　　考
	直径	高さ	
1	19.8	3.0	墳頂に深さ 2.4 m の盗掘坑
2	11.3	1.5	3ヶ所に盗掘坑痕、1910 年前後に 1.5 m の大刀が出土
3	9.0	0.7	南側に盗掘坑、1910 年前後に短甲が出土
4	14.76	1.3	南側に盗掘坑
5	16.56	1.5	原形を良好に留める
6	－	－	原形を留めないので未計測
7	11.34	0.79	盗掘坑あり（主体部には当たらず）
8	10.8	0.76	原形を留める
9	－	－	原形を留めないので未計測、地下式横穴墓の玄室が陥没
10	10.8	1.0	側面に盗掘坑（主体部には当たらず）
11	10.8	0.9	頂部に盗掘坑（主体部には当たらず）
12	9.0	0.9	側面に盗掘坑（主体部には当たらず）

註

(1)　報告書（えびの市教育委員会第 29 集 2001）では、直径 27 m と記述しているが、15 m の誤りである。



第 16 図　島内地下式横穴墓群　遺構タイプ別分布図

第４章　宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群出土の人骨
－175 号墓・177 号墓・179 号墓から出土した人骨―

鹿児島女子短期大学・竹中正巳

はじめに

宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群では、大型農業機械による畑の耕作の際、玄室が陥没し、地下式横穴墓が発見されている。これらの不時発見に対応する緊急発掘はえびの市教育委員会により、その都度、しっかり行われている。本稿では、2020 年から 2023 年にかけて緊急調査された島内地下式横穴墓群 175・177・179 号墓で出土した古墳時代人骨について報告する。

出土人骨の所見

島内地下式横穴墓群 175 号墓から３体、177 号墓から１体、179 号墓から２体の古墳時代人骨が出土した。各人骨の個別の計測値、観察データおよび特記事項は、表１～６に示す。175 号墓１～３号人骨の頭蓋写真を写真１～３に示す。

島内地下式横穴墓群を営んだ人々の形質

南九州の男性古墳時代人骨の研究から、山間部と宮崎平野部では形質に違いがあり、縄文人的特徴を残す南九州山間部に対し、宮崎平野部の古墳時代人には、渡来人の遺伝的影響が強く現れているとされる。南九州山間部の古墳人は西北九州弥生人に極めて類似している（松下、1990）。西北九州弥生人は、頭蓋計測値、頭蓋形態小変異の分析のいずれもが縄文人に類似し、体質的にも文化的にも縄文人的色彩が遅くまで持続した集団と考えられている（内藤、1984；Saiki et。al、2000）。

1994 年以降、南九州山間部、加久藤盆地に位置する島内地下式横穴墓群（えびの市）から 200 体を越える古墳時代人骨が出土した。「島内地下式横穴墓群」の成人骨は周辺の南九州山間部の古墳人と同様の特徴を多く持つ。しかし、個別にみていくと、非縄文人的特徴を持ち合わせている個体もかなり存在する。サイズの比較的大きな脳頭蓋、頭蓋長幅示数が中頭型、広鼻、前頭部の突出、鼻骨の湾曲、大腿骨の柱状性などが、周辺の南九州山間部の古墳人と同様の特徴である。島内の上顔高、眼窩高が高い点などは異なる特徴である。

島内は、頭蓋計測値の分析結果でも西北九州弥生人とやや異なり、頭蓋形態小変異の出現頻度の分析結果からも類似しない。この頭蓋計測と頭蓋形態小変異の分析結果は、島内の人々が、南九州の山間部の中で異なった存在であり、渡来系の遺伝子をある程度受け入れた集団であるとの解釈を可能にすると考えられる。2012 年段階の頭蓋計測と頭蓋形態小変異の分析結果から、島内の人々は、南九州の山間部の中で異なる存在であり、渡来系の遺伝子をある程度受け入れた集団であるとの解釈を可能にすると考えた。

今回、2020 年から 2023 年までに出土した人骨を実見したが、頭蓋主要部が計測できたのは 175 号墓から出土した女性人骨３体のみであった。この３体については、縄文人的な特徴を多く持つ。いずれの個体も顔面部は低顔傾向を示し、低眼窩、広鼻である。ただ、顔面平坦度については、鼻骨の平坦性は高い。また、南九州の山間部の地下式横穴から出土する古墳時代人骨に外耳道骨腫がよく認められる。今回報告の 175 号墓１号人骨と２号人骨にも認められた。

表 1　島内地下式横穴墓群 175・177・179 号墓出土人骨

墓番号	人骨番号	性別	年齢	保存状態	赤色顔料頭部	赤色顔料上半身	赤色顔料下半身	特記事項
175 号墓	1 号人骨	女性	熟年	△	○	×	×	仰臥伸展葬
	2 号人骨	女性	壮年	△	×	×	×	仰臥伸展葬
	3 号人骨	女性	壮年後期	△	○	×	×	仰臥伸展葬
177 号墓	1 号人骨	男性	熟年	×	○	不明	不明	仰臥伸展葬
179 号墓	1 号人骨	不明	成人？	×	×	×	×	
	2 号人骨	不明	成人？	×	×	×	×	

表 2　脳頭蓋計測値（mm）及び示数

	人骨番号	島内 175-1	島内 175-2	島内 175-3	島内 177-1
	性別	女性	女性	女性	女性
M No.	年齢	熟年	壮年	壮年後期	壮年後期
1	頭蓋最大長	173	169	166	
8	頭蓋最大幅		131	141	
17	バジオン・ブレグマ高	128		127	
3	グラベロラムダ長	170		165	
20	耳ブレグマ高				
5	頭蓋底長	101		98	
9	最小前頭幅	90	85	98	
10	最大前頭幅		109	110	
11	両耳幅	122	118	123	
12	最大後頭幅			107	
13	乳突幅				
7	大後頭孔長	29			
16	大後頭孔幅	28		28	
23	頭蓋水平周			501	
24	横弧長		283	305	
25	正中矢状弧長	358			
26	正中矢状前頭弧長	118	121	115	
27	正中矢状頭頂弧長	124	122	119	128
28	正中矢状後頭弧長	116			
29	正中矢状前頭弦長	102	105	102	
30	正中矢状後頭頂弦長	112	109	106	113
31	正中矢状後頭弦長	86			
8/1	頭蓋長幅示数		77.5	84.9	
17/1	頭蓋長高示数	74.4		76.5	
17/8	頭蓋幅高示数			90.1	
20/1	頭長耳ブレグマ高示数				
20/8	頭幅耳ブレグマ高示数				
9/10	横前頭示数			89.1	
9/8	横前頭頭頂示数		78.0	69.5	
16/7	大後頭孔示数	96.6	64.9		
1+8+17/3	頭蓋モズルス			144.7	
26/25	前頭矢状弧示数	33.0			
27/25	頭頂矢状弧示数	34.6			
28/25	後頭矢状弧示数	32.4			
27/26	矢状前頭頭頂示数	105.1	100.8	103.5	
28/26	矢状前頭後頭示数	98.3			
28/27	矢状頭頂後頭示数	93.5			
29/26	矢状前頭示数	86.4	86.8	88.7	
30/27	矢状頭頂示数	90.3	89.3	89.1	88.3
31/28	矢状後頭示数	74.1			

表 3　顔面頭蓋計測値（mm）及び示数

	人骨番号	島内 175-1	島内 175-2	島内 175-3
	性別	女性	女性	女性
M No.	年齢	熟年	壮年	壮年後期
40	顔長	108		
45	頬骨弓幅	134	127	136
46	中顔幅	((108))	98	((104))
47	顔高		107	100
48	上顔高	64	62	((55))
51	眼窩幅（左）	41	38	42
	眼窩幅（右）		37	41
52	眼窩高（左）	32	34	35
	眼窩高（右）		34	
54	鼻幅	29	27	29
55	鼻高	46	44	((45))
H.	NLH 鼻高	46		
43	上顔幅	103	100	108
44	両眼窩間幅		92	103
50	前眼窩間幅		22	28
F.	鼻根横弧長		24	29
57	鼻骨最小幅	12	8	14
60	上顎歯槽長			
61	上顎歯槽幅			
62	口蓋長			
63	口蓋幅			
47/45	Kollmann 顔示数		84.3	73.5
47/46	Virchow 顔示数		109.2	((96.2))
48/45	Kollmann 上顔示数	47.8	48.8	((40.4))
48/46	Virchow 上顔示数	((59.3))	63.3	52.9
52/51	眼窩示数（左）	78.0	89.5	83.3
	眼窩示数（右）		91.9	
54/55	鼻示数	63.0	61.4	((64.4))
40+45+57/3	顔面モズルス			
61/60	上顎歯槽示数			
63/62	口蓋示数			
64/63	口蓋高示数			
40/5	顎示数	106.9		
50/44	眼窩間示数		23.9	27.2
50/F.	鼻根湾曲示数		91.7	96.6
65	下顎関節突起幅			129
65（1）	下顎筋突起幅		96	92
66	下顎角幅			
69	オトガイ高		31	28
69（1）	下顎体高（左）			
	下顎体高（右）		30	
69（3）	下顎体厚（左）		14	11
	下顎体厚（右）		14	
70a	下顎頭高（左）			
	下顎頭高（右）		59	
70	下顎枝高（左）			
	下顎枝高（右）		62	
71	下顎枝幅（左）			34
	下顎枝幅（右）		36	
71a	最小下顎枝幅（左）			34
	最小下顎枝幅（右）		36	
68	下顎（体）長			
68（1）	下顎長			
79	下顎枝角（左）			
	下顎枝角（右）		119	
71/70	下顎枝示数（左）			
	下顎枝示数（右）		58.1	

表４　女性成人骨の頭蓋形態小変異の出現状況

	人骨番号	島内 175-1		島内 175-2		島内 175-3		島内 177-1	
	性別	女性		女性		女性		女性	
	年齢	熟年		壮年		壮年後期		壮年後期	
		右	左	右	左	右	左	右	左
1	ラムダ小骨				−		−		
2	ラムダ縫合骨	−			−	+			
3	インカ骨								
4	横後頭縫合痕跡								
5	アステリオン小骨	−				−			
6	後頭乳突縫合骨	−				−	−		
7	頭頂切痕骨	−				−	−		
8	頭頂孔								
9	冠状縫合骨								
10	前頭縫合残存		−		−		−		
11	眼窩上神経溝	−	−	−	−	−	−		
12	眼窩上孔	−	−	+	−	−	−		
13	前頭孔	−	−	−	−	−	−		
14	二分頬骨		−	−			−	−	
15	横頬骨縫合痕跡		−	−			−	+	
16	頬骨顔面孔欠如								
17	口蓋隆起		−		+		−		
18	内側口蓋管骨橋	−	−	−	−	−	−		
19	外側口蓋管骨橋	−	−	−	−	−	−		
20	歯槽口蓋管	−	−	−	−	−	−		
21	顆管欠如	+	−			+	−		
22	後頭顆前結節	−	−			−	−		
23	第３後頭顆		−		−		−		
24	後頭顆旁突起	−	−			−	−		
25	舌下神経管二分	−	−	−		−	−		
26	頸静脈孔二分	−	−			−	−		
27	偏側頸静脈孔優位		−			−	−		
28	外耳道骨瘤	−	+	+	+	−	−		
29	フシュケ孔	−	+	−	−	−	−		
30	ベサリウス孔	−	−			−	−		
31	卵円孔形成不全	−	−			−	−		
32	棘孔開裂	−	−			−	−		
33	翼棘孔	−	−			−	−		
34	床状突起間骨橋					−	−		
35	左側横洞溝優位								
36	鱗状縫合骨								
37	矢状縫合骨								
38	ブレグマ小骨								
39	後頭顆二分								
40	下顎隆起								
41	顎舌骨筋神経管								
42	副オトガイ孔			−	−	−	−	−	
43	下顎隆起			+	−	−	−		
44	顎舌骨筋神経管			−			−		
45	副下顎管								

表 5　顔面平坦度計測値（mm）及び示数

人骨番号	島内 175-1	島内 175-2	島内 175-3
性別	女性	女性	女性
年齢	熟年	壮年	壮年 後期
前頭骨弦	95.7	89.2	102.4
前頭骨垂線	10.8	15.9	16.0
前頭骨平坦示数	11.3	17.8	15.7
鼻骨弦	11.6	7.7	13.5
鼻骨垂線	2.5	2.0	2.6
鼻骨平坦示数	21.2	26.2	15.7
頬上顎骨弦		96.4	
頬上顎骨垂線		22.1	
頬上顎骨平坦示数		23.0	

表 6　大腿骨計測値（mm）及び示数

	人骨番号		島内 175-1
	性別		女性
大腿骨 M No.	年齢		熟年
6	骨体中央矢状径	左	
		右	24
7	骨体中央横径	左	
		右	26
8	骨体中央周	左	
		右	79
6/7	骨体中央断面示数	左	
		右	92.3

写真 1　島内地下式横穴墓群 175 号墓 1 号人骨（女性・熟年）

写真２　島内地下式横穴墓群 175 号墓２号人骨（女性・壮年）

写真３　島内地下式横穴墓群 175 号墓３号人骨（女性・壮年後期

第5章　島内174号～179号地下式横穴墓の三次元計測

えびの市域の地下式横穴墓群における三次元計測　えびの市では2014年度の島内139号地下式横穴墓の発掘調査で大量の副葬品が出土し、その記録方法が課題となった。そこで、当時まだ試行段階であったAgisoft社Metashape（旧Photoscan）を利用したSfM/MVSによる三次元計測を奈良文化財研究所・金田明大氏のご協力のもとに実施し、調査を円滑に進めることができた。この成果をもとに2015年度以後、えびの市の地下式横穴墓の調査に当たって、鹿児島大学総合研究博物館・橋本達也が写真撮影、フォトグラメトリによる三次元データ作成を行っている。

その成果として、『えびの市埋蔵文化財調査報告書第58集　島内地下式横穴墓群Ⅵ　灰塚地下式横穴墓群Ⅱ』(2020年)で島内164号～173号墓、『同62集　小木原地下式横穴墓群Ⅱ　古代官道跡』(2023年）で小木原5001号～5003号・5005号墓の報告を行っている。

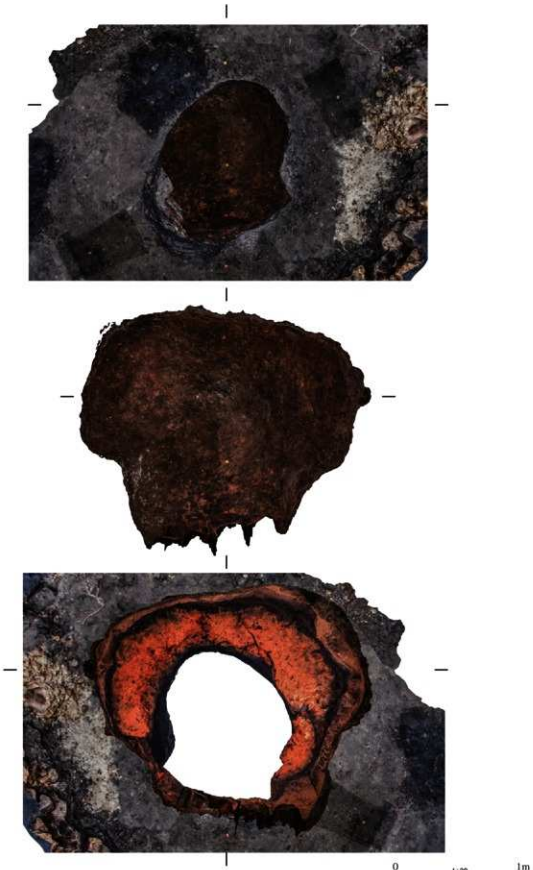
ここでは、2019年度～2023年度に調査された島内174号墓～179号墓の三次元計測の成果を掲載する。撮影は以下の年月に実施した。その後、鹿児島大学総合研究博物館にてMetashapeでデータの作成を行い、CloudCompareにて展開画像の作成、Adobe Photoshopで画像加工、Illustratorで展開図レイアウトを行った。撮影年月、174号墓：2019年8月、175号墓：2020年9～10月、176号墓：10月、177号墓：2020年10月、178号墓：2021年4月、179号墓：2023年6月。

今回、調査対象となったものには、竪坑上部閉塞・板石閉塞・土塊閉塞といった各種地下式横穴墓があった。竪坑上部閉塞の1基は閉塞石が開口したもので玄室は完存していたが、板石閉塞・土塊閉塞の地下式横穴墓は玄室天井が陥没したもので竪坑・羨道部は未調査である。

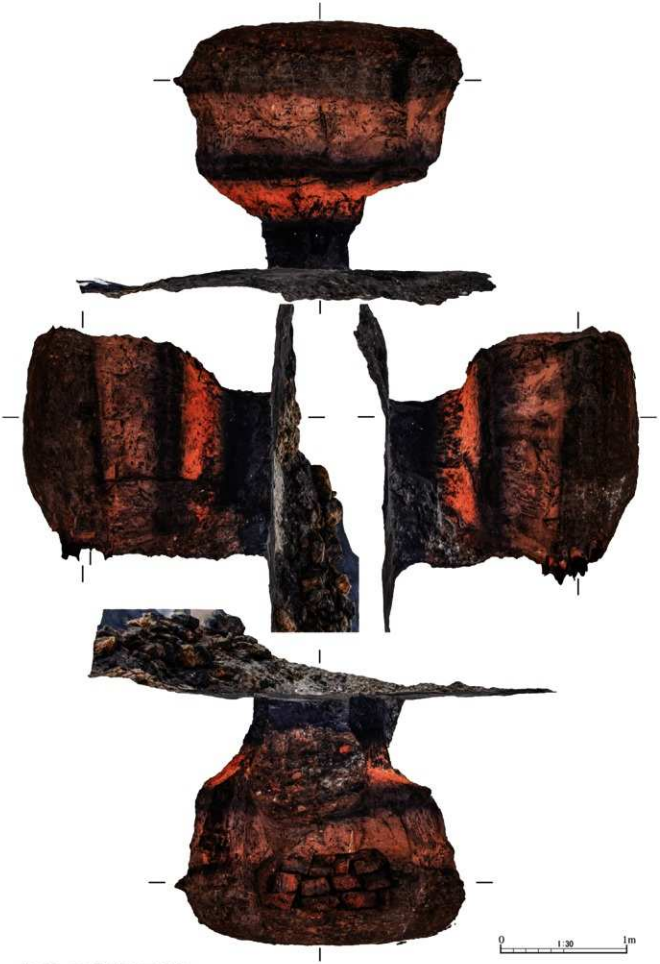
175号は狭い玄室に人骨が良好に残ることから写真撮影に工夫を要した。179号の竪坑上部閉塞タイプは非常に狭いため、従来は竪坑・玄室を分けて三次元データを作成するなど比較的難易度が高かったが、ソフトの進化によって全体が一括でデータ作成可能になり、やや難易度は下がった。その他は概して玄室が広く、また人骨の残りも不良で、副葬品も少なかったために比較的写真撮影、三次元データの作成はスムーズに行えたが、CloudCompareのバージョン（2.12.0）にバグがあり、当初切り出した展開図のサイズが適正でなく、完成後スケール調整をし直すということがあった。

地下式横穴墓における三次元計測の有効性　発掘調査において資料観察に基づく記録法として実測は必須であるが、実測図は作者の認識に固定され、かつ線画はきわめて多くの情報を捨象しており、複雑な立体構造をもつ地下式横穴墓に対して分析・検証の有効範囲が相当に限定される。また通常、地下式横穴墓の保存方法は埋め戻すしかなく実物の公開・活用が困難という特性もある。これらの問題点に対応する上で三次元データの利用は有効だと考える。これまで、えびの市の地下式横穴墓において報告済み分のデータは、WEB上の三次元データ共有サービス、Sketchfabで公開を行っている。今回、報告のデータも以下のURLで順次公開予定を予定している。「えびの市の文化財、スケッチファブ」で検索していただきたい。

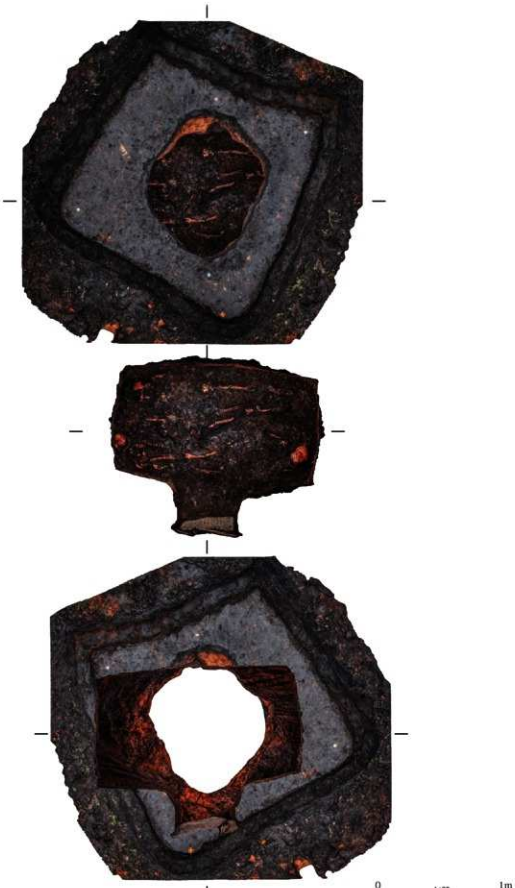
Sketchfabアカウント名：宮崎県えびの市の文化財　https://sketchfab.com/ebino



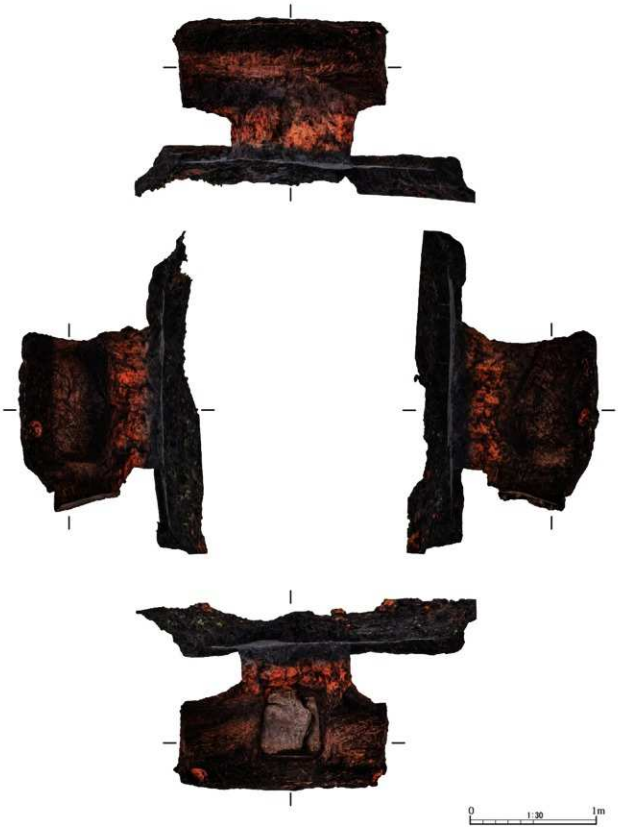
第１図　174 号墓三次元展開図



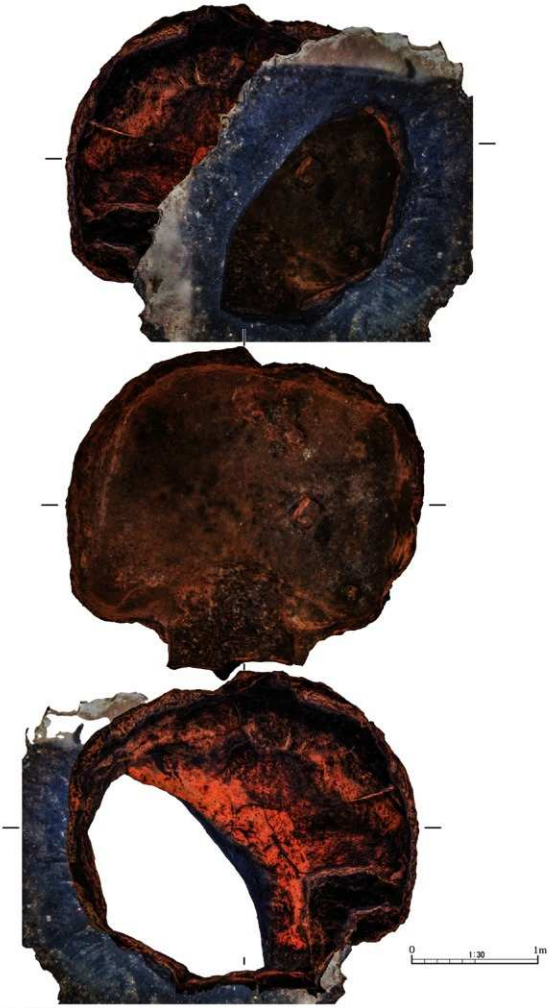
第２図　174 号墓三次元展開図



第3図　175号墓三次元展開図



第４図　175 号墓三次元展開図



第５図　176 号墓三次元展開図

第6図　176号墓三次元展開図

第７図　177 号墓三次元展開図

第８図　177 号墓三次元展開図

第９図　178 号墓三次元展開図

第 10 図　178 号墓三次元展開図

第 11 図　179 号墓三次元展開図

第 12 図　179 号墓三次元展開図

第 13 図　174 号～ 179 号墓一覧

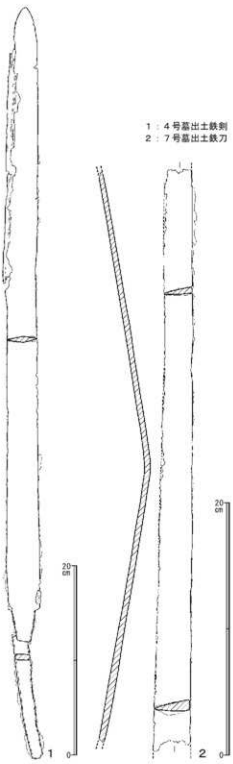
第６章　島内４号・５号・７号墓出土重要文化財について

本章では、島内地下式横穴墓群の発掘調査において、その初期に調査が行われていたものの、出土遺物の報告が十分に行われていなかった４号墓・５号墓・７号墓出土の遺物について図化を行った。ここで図化した資料については、『宮崎県史　資料編』考古２（以下、『宮崎県史』と略。）の「島内地下式横穴墓群」の項中に掲載されている資料と重複するものもあるが、『宮崎県史』では出土遺構が明記されていないため、現状、十分に活用することができていない点が問題であった。なお、これらの資料は、えびの市所蔵資料であるが、宮崎県立西都原考古博物館において保管しており、鉄製品については観察表の備考欄に記載の登録番号が付与されている。

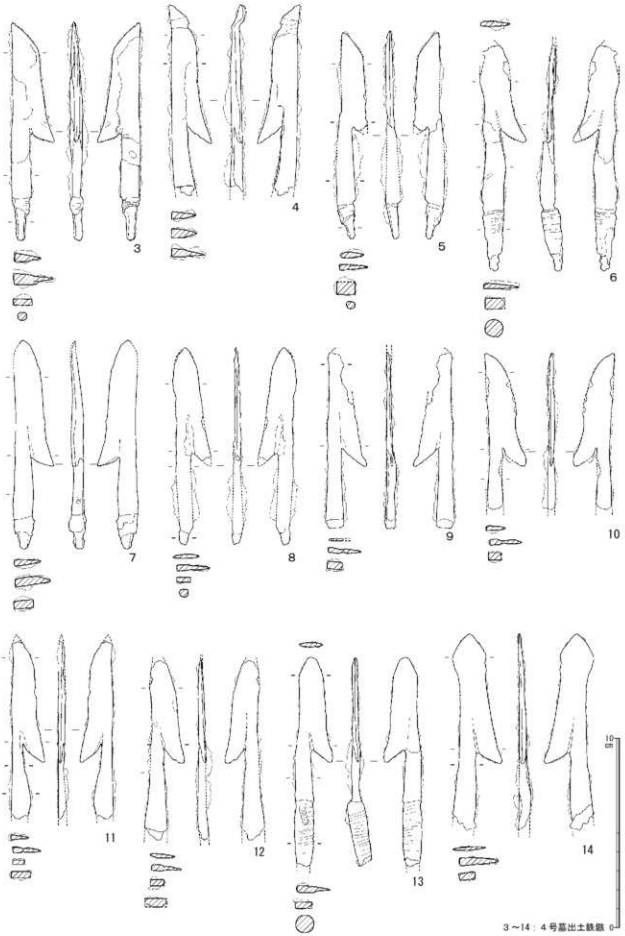
島内４号墓（旧 43-1 号墓）は、昭和 43 年２月の「えびの地震」に伴って玄室天井が崩落したため、発掘調査が行われた。その調査内容については、『宮崎県文化財調査報告　第 14 集』において報告が行われている。４号墓は玄室内からは被葬者２人分の人骨が確認されており、それに伴い鉄剣１点・鉄鏃 18 点・刀子２点の出土が報告されている。これらの出土遺物については、刀子２点は実測図が掲載されているものの、その他の遺物については写真のみの掲載である。今回の報告では、その出土資料の中で、鉄剣１点・鉄鏃 18 点（第２・３図－３～ 20）の図化を行った。

鉄剣（第１図－１）は全長約 80㎝であるが、茎部の途中で折れて、その部分で接合されており、その部分でズレている。刃部には鞘と考えられる木質が部分的に銹化して遺存している。

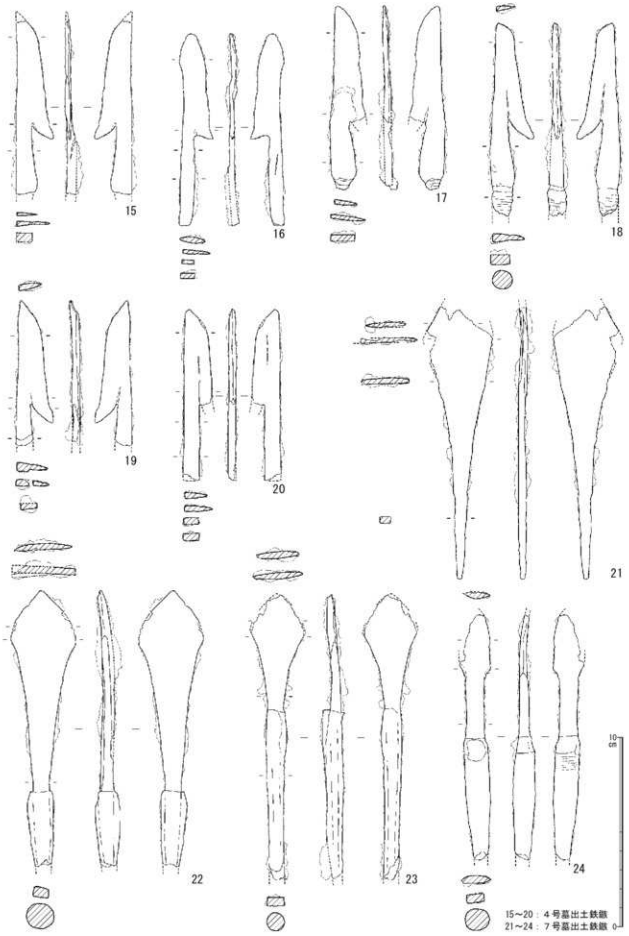
鉄鏃 18 点（第２・３図－３～ 20）はいずれも片刃鏃であるが、残存している矢柄などから、刃部と矢柄の間に長め頸部を有しており、長頸鏃的な要素を持っている。刃部の形態は、通有の刀子状の片刃形態のほか、切先部付近のみを両刃にする特徴的な形態のものもみられる。切先付近が両刃を呈するものの中には、剣先状に幅が広がるものもみられる。このほかにも、刃部の湾曲の仕方や、逆刺の形状などにも差違がみられる。比較的類似した形態となる他型式の鉄鏃に比べるとバリエーションが多いようである。切先部の片刃・両刃等の形状については、島内地下式横穴墓群の他の墳墓でも同様に両者が共伴する傾向にあり、複数の製作者（あるいは集団）を示している可能性がある。このほか、第



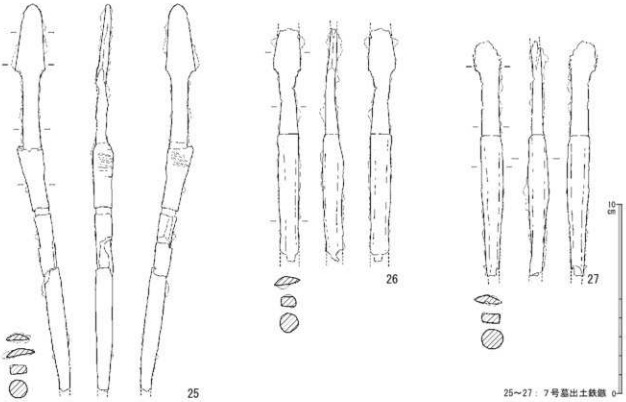
第１図　島内４号・７号墓出土刀剣類



第2図　島内4・7号墓出土鉄鏃（1）



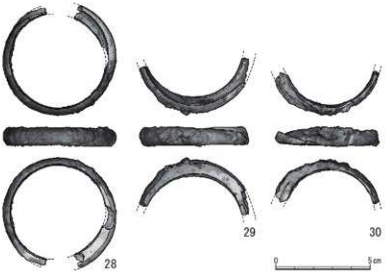
第３図　島内４・７号墓出土鉄鏃（２）



第４図　島内４・７号墓出土鉄鏃（２）

２図－３・６・７・12には銹化したハエの囲蛹殻が確認できる。

島内５号墓（旧43－２号墓）も、４号墓と同じく昭和43年の「えびの地震」によって玄室天井部が崩落したことにより発掘調査が行われた。調査内容については、４号墓と同じく『宮崎県文化財調査報告　第14集」において報告が行われている。５号墓は玄室内からは、被葬者１人分の人骨が確認されており、それに伴って、貝釧３点と鉄片の出土が報告されている。報告中では、４号墓と同じく、写真のみが掲載されている。今回の報告では、この出土した貝釧３点について図化を行った。



第５図　島内５号墓出土貝釧

３点の貝釧（第５図－28～30）はいずれもイモガイ製であるが、出土当時の原形を留めているものは、第５図－28のみで、他の２点は報告中の写真と比較すると欠損部位が大きい。なお、重要文化財の指定から外れた貝釧の破片の中に、４号墓出土品とするものがあることから、それらが接合する可能性がある。３点の貝釧は、30の外面には、わずかであるが固着した布の痕跡を確認することができる。

島内７号墓（旧 46－２号墓）は、台地上の砂利掘削工事に伴う重機が落ち込んだことにより発見されたもので、昭和 46 年に調査が行われた。その内容については、『宮崎県文化財調査報告書　第 16 集』において報告が行われている。７号墓の玄室内からは、被葬者３～４人分の人骨が確認されており、それに伴って、鉄刀１点、鉄鏃８点、貝釧４点が出土している。報告においては、４・５号墓と同じく、写真のみが掲載されている資料である。今回の報告では、出土した遺物のうち、当館で保管している鉄刀１点と鉄鏃７点について図化を行った。残る鉄鏃１点については、当館の保管品の中には確認できなかったため、図化していない。

鉄刀（第１図－２）は、残存部の中ほどで折れ曲がっており、「く」字状を呈し、現存長約 45㎝であるが、まっすぐにした場合 47㎝程と思われる。切先や茎部は欠失しており、刃部のみが残っている。この「く」字状の折れは、副葬当時からのものかは不明である。表面には鞘などの遺存は確認できない。

鉄鏃は圭頭鏃３点（第３図 -21 ～ 23）、長頸鏃４点（第３・４図 -24 ～ 27）である。圭頭鏃の中で、22 は刃部と矢柄の間に比較的距離があり、長頸鏃的な傾向を有している。長頸鏃は、刃部は平面が長三角形で、断面は方丸鏃造となっている。また、図化できなかった残る１点の鉄鏃については、調査報告掲載の写真を見る限り、圭頭鏃の可能性が高い。

【引用・参考文献】

えびの市教育委員会　2001『島内地下式横穴墓群』えびの市埋蔵文化財調査報告書第 29 集

宮崎県　1993『宮崎県史 資料編』考古２

宮崎県教育委員会　1969『宮崎県文化財調査報告書』第 14 集

宮崎県教育委員会　1972『宮崎県文化財調査報告書』第 16 集

島内４号墓出土遺物観察表

No	重文登録No.	種類	法量（mm）			備　考	No	重文登録No.	種類	法量（mm）			備　考
			全長	刃部長	刃部幅					全長	刃部長	刃部幅	
1	23	鉄剣	794.5	637.0	55.0	ST4-001	12	112	鉄鏃	95.0	54.5	18.5	ST4-011
3	103	鉄鏃	115.0	63.0	22.5	ST4-002	13	113	鉄鏃	(111.0)	55.5	20.0	ST4-012
4	104	鉄鏃	(101.0)	72.0	21.0	ST4-003	14	114	鉄鏃	(104.0)	68.5	23.5	ST4-013
5	105	鉄鏃	110.0	(53.0)	15.0	ST4-004	15	115	鉄鏃	(91.5)	62.5	21.0	ST4-014
6	106	鉄鏃	(119.5)	(52.0)	22.0	ST4-005	16	116	鉄鏃	101.5	55.5	16.0	ST4-015
7	107	鉄鏃	110.5	66.5	20.5	ST4-006	17	117	鉄鏃	97.5	(62.00	(18.5)	ST4-016
8	108	鉄鏃	104.5	(60.0)	(18.5)	ST4-007	18	118	鉄鏃	(102.0)	61.5)	23.0	ST4-017
9	109	鉄鏃	(93.0)	(60.5)	20.5	ST4-008	19	119	鉄鏃	(77.0)	64.5	20.5	ST4-018
10	110	鉄鏃	(82.5)	(59.5)	20.0	ST4-009	20	120	鉄鏃	90.5	(50.5)	(16.0)	ST4-019
11	111	鉄鏃	(94.0)	(63.5)	17.5	ST4-010							

島内５号墓出土遺物観察表

No	重文登録No.	法量（mm）			素材	備　考	No	重文登録No.	法量（mm）			素材	備　考
		長さ	幅	高さ					長さ	幅	高さ		
28	1002	60.0	(7.5)	1.0	イモガイ		30	1004	(31.5)	88.0)	9.5	イモガイ	
29	1003	(58.0)	(8.5)	(9.5)	イモガイ								

島内７号墓出土遺物観察表

No	重文登録No.	種類	法量（mm）			備　考	No	重文登録No.	種類	法量（mm）			備　考
			全長	刃部長	刃部幅					全長	刃部長	刃部幅	
2	60	鉄刀	(461.5)	(461.5)	(28.5)	ST7-008	24	124	鉄鏃	(129.5)	(31.5)	(16.0)	ST7-004
21	121	鉄鏃	(142.0)	(12.5)	(34.0)	ST7-001	25	125	鉄鏃	(205.0)	35.0	(17.5)	ST7-005
22	122	鉄鏃	(146.0)	28.0	(34.5)	ST7-002	26	126	鉄鏃	(123.5)	(22.0)	22.0	ST7-006
23	123	鉄鏃	(151.0)	(20.5)	28.0	ST7-003	27	127	鉄鏃	(124.5)	(11.0)	(14.0)	ST7-007

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

第７章　えびの市島内地下式横穴墓群の地中レーダー探査

東　憲章（宮崎県埋蔵文化財センター）

１　地中レーダー探査実施の経緯

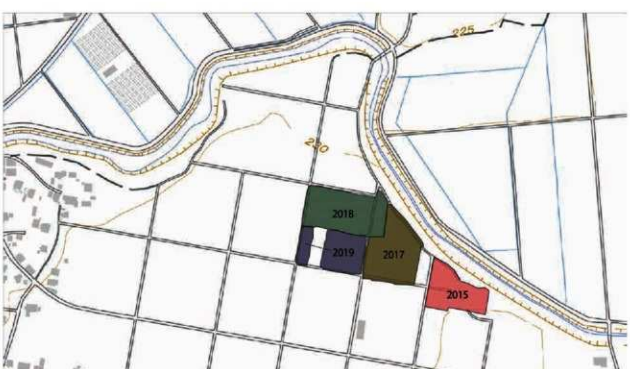
島内地下式横穴墓群は、県内で最も遺構分布密度の高い地下式横穴墓群であり、これまでに調査された 200 基余り以外にも、その数倍の地下式横穴墓が分布しているものと想定されている。

また、島内地下式横穴墓群は、鉄製の武器、武具、馬具など、豊富な副葬品を持つものも多く、これらは遺存状態が非常に良好である。平成 24 年９月には一括 1028 点が国の重要文化財に指定された。銀象嵌龍文大刀や銀装円頭大刀、胡録、銀象嵌を持つ鍛冶具（鉄鉗、ノミ状工具）など韓半島に系譜を持つ注目すべきものも見られる。

このように非常に重要な遺跡である島内地下式横穴墓群であるが、夏季の激しい乾燥や営農集約化に伴う大型農業機械の使用などによって、毎年のように玄室の陥没による不時発見と緊急調査が行われてきた。

こうした状況の中、同墓群の面的な遺構分布を把握することは、遺跡保護の上で非常に重要かつ喫緊の課題となっていた。県教育委員会では、「重要古墳等保護活用推進事業」の一環として、平成 27（2015）年度に県指定「真幸村古墳」１号を含む約 3800㎡に対して地中レーダー探査を実施した。

これに続き、えびの市教育委員会は、同墓群の中でも重要遺構の集中する中心域の状況把握を目的として、宮崎県西都原考古博物館に地中レーダー探査の実施を依頼し、平成 29 年度からの３ヵ年で実施した（第１図）。



第１図　島内地下式横穴墓群の地中探査範囲（年度別）

2　地中レーダー探査の概要

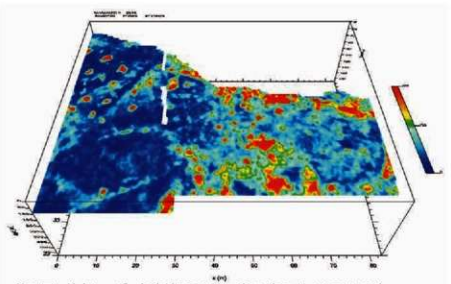
島内地下式横穴墓群の地中レーダー探査は、宮崎県立西都原考古博物館所有の米国 GSSI 社製 SIR-3000 型デジタルパルスレーダーシステムと 270MHz アンテナを使用した。

国土座標に合わせて設置されたグリッド杭を基準に、南北あるいは東西方向に張ったメジャーテープに沿ってアンテナを走査し、50㎝ずつ平行移動した。

システムは連続モードで使用し、50 スキャン／秒でデータを収集した。これは平均して通常歩行と手引きのペースで 2㎝毎に 1 スキャンのデータを収集したことになる。

データは 16 ビットで記録し、512 サンプル／スキャンでデジタル化した。データを記録する時間帯（Time Window）は 200 ナノ秒（NS）とし、レーダー波の地中速度は県内の火山灰質土壌を基本とする台地上の遺跡における平均的な速度 0.065m ／ NS としたので、深さに換算すると約 6.5 m までの深さのデータを記録したことになる。

データの解析は、Dean Goodman 氏の開発した解析ソフトウエア GPR-SLICE を使用した。このソフトウエアは、収集したデータを断面図（radargram）、平面図（time slice）で表示するばかりでなく、一定以上の強さの反射を重ねて表示するオーバーレイ解析（overlay）や、三次元での表示（3D time slice）も可能である（第 2 図）。



第 2 図　地中レーダー探査結果の三次元表示（3D タイムスライス）

各年度毎の探査の概要は以下のとおりである。

【平成 27（2015）年度】

重要古墳等保護活用推進事業（宮崎県埋蔵文化財センター）

探査実施日：2016 年 3 月 29 日～ 30 日

探査対象地：県指定「真幸村古墳」1 号墳とその西側（3,810㎡）

探査の成果：アンテナ走査距離 7,621 m

地下式横穴墓あるいは類似遺構の可能性が高い地点 35 ヶ所

真幸村古墳 1 号墳の埋葬施設の推定（横穴式石室）

探査実施者：宮崎県立西都原考古博物館：東憲章、沖野誠

宮崎県埋蔵文化財センター：日高広人、高橋浩子

【平成 29（2017）年度】

えびの市教育委員会からの依頼

探査実施日：2018 年 3 月 22 日～ 23 日

探査対象地：139 号地下式横穴墓・3 号板石積石棺墓が立地する畑の西側（5,438㎡）

探査の成果：アンテナ走査距離 10,876 m

地下式横穴墓あるいは類似遺構の可能性が高い地点 39 ヶ所

探査実施者：宮崎県立西都原考古博物館：東憲章、沖野誠、田中敏雄

【平成 30（2018）年度】

えびの市教育委員会からの依頼

探査実施日：2019 年 3 月 5 日～ 6 日

探査対象地：2017 年度の範囲の西側北半（5,689㎡）

探査の成果：アンテナ走査距離 11,378 m

地下式横穴墓あるいは類似遺構の可能性が高い地点 31 ヶ所

探査実施者：宮崎県立西都原考古博物館：東憲章、加藤徹、田中敏雄

【平成 31（2019）年度】

えびの市教育委員会からの依頼

探査実施日：2020 年 3 月 5 日～ 6 日

探査対象地：2017 年度の範囲の西側南半、2018 年度の南側（3,694㎡）

探査の成果：アンテナ走査距離 7,387 m

地下式横穴墓あるいは類似遺構の可能性が高い地点 19 ヶ所

探査実施者：宮崎県埋蔵文化財センター：東憲章

宮崎県立西都原考古博物館：加藤徹、松本茂

3　地中レーダー探査の結果

探査結果を各年度毎に示す。

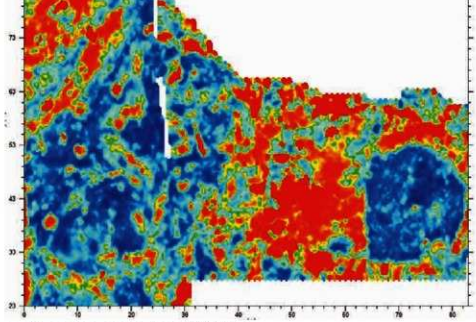
⑴　平成 27（2015）年度

県指定「真幸村古墳」1 号墳とその西側の範囲約 3,810㎡である。これまでに 1 号墳の周囲で 4 基の地下式横穴墓が発見、調査されている。また、甲冑が出土したとされる 1 号地下式横穴墓は、石槨墓であった可能性が指摘されているが、現在は数個の石材が散布するものの、墳丘や埋葬施設は削平されて確認することはできない。

第 3 図は地表下 0.5m から 2.16m までのデータで、一定以上の強い反射を重ねて表示するオーバーレイ解析の結果である。現在畑として使用されている西半部や、「真幸村古墳」西側の広場

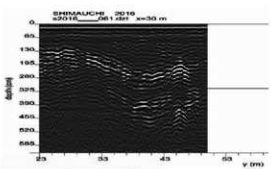
となっている範囲にも点状に強い反射が多数見られる。この全ての点状反射部分について断面図（radargram）を確認し、地下式横穴墓などの地下遺構が示す特徴的な双曲線形（パラボラ形）の反射（第４図）が認められたものをチェックしたものが第５図である。地下式横穴墓あるいは類似遺構の可能性が高い地点（白地に赤のドット）が 35 ヶ所存在する。

また、真幸村古墳１号墳については地表下 5.03m までのオーバーレイ解析を行うと、墳丘の東北東方向から墳丘中心に向かう弱反射のエリアと、それを取り囲む強い反射が認められる（第６図）。これはその形状から横穴式石室である可能性が指摘されよう。地元の古老の「子どもの頃にはトンネルのように中に入ることができた。」という話も、石室の存在を想起させる。

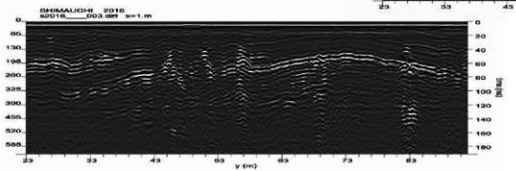


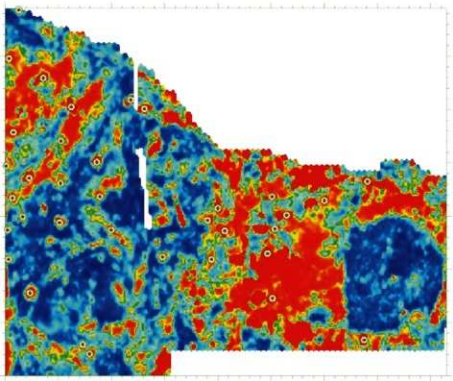
第３図　平成 27（2015）年度の探査結果①

（右）第４図ａ　断面データ①
地下式横穴墓の空洞の存在を示す
明瞭な双曲線形の反射

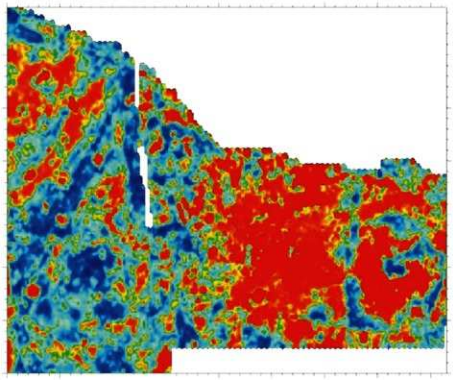


（下）第４図ｂ　断面データ②
同一測線に５ヵ所の反射が見られる





第 5 図　平成 27（2015）年度の探査結果②

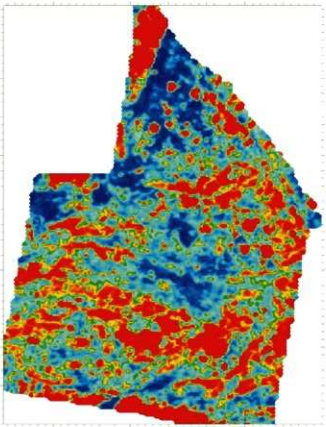


第 6 図　平成 27（2015）年度の探査結果③
真幸村古墳 1 号墳の横穴式石室らしき反射が見られる。

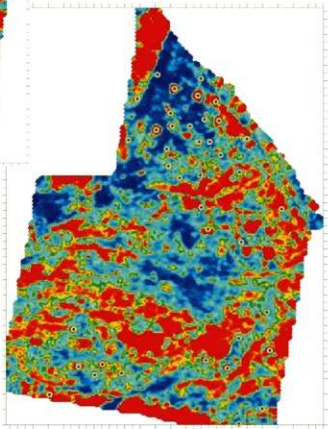
⑵　平成 29（2017）年度

平成 27 年度範囲の西側、139 号地下式横穴墓や 3 号板石積石棺墓などの現地保存施設に隣接する 5,438㎡である。この範囲には、銀象眼龍文大刀が出土した 114 号墓、甲冑が出土した 81 号墓、115 号墓などが分布しており、同墓群の中でも比較的階層が高い被葬者の墳墓が集中する中心域と言える。

第 7 図は、地表下 0.5m から 3.07m までのオーバーレイ解析の結果である。点状の強い反射が多数見られるが、これら全ての断面図を確認すると、地下式横穴墓あるいは類似遺構の可能性の高い地点が 39 ヶ所認められた（第 8 図）。その分布をみると、探査範囲の北寄りと南寄りの 2 群に分かれ、中央部は空白となっている。



第 7 図　平成 29（2017）年度の探査結果①

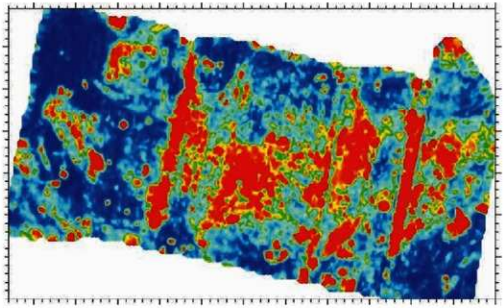


第 8 図　平成 29（2017）年度の探査結果②

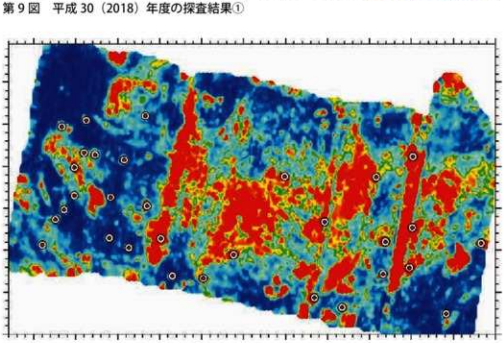
⑶　平成 30（2018）年度

前年度範囲の西側に隣接する北半部で 5,689㎡である。甲冑が出土した 3 号墓をはじめとする数多くの地下式横穴墓がこれまでに発見、調査されている。この周辺は、地下式横穴墓の閉塞方法に関して、竪坑上部閉塞タイプと羨門板石閉塞タイプの分布が重なる範囲である。

第 9 図は、地表下 0.5m から 1.86m までのオーバーレイ解析の結果である。探査範囲の全体に点状の強い反射が見られ、全てを断面図で確認したところ、地下式横穴墓あるいは類似遺構の可能性が高い地点は 31 ヶ所認められた（第 10 図）。



第 9 図　平成 30（2018）年度の探査結果①

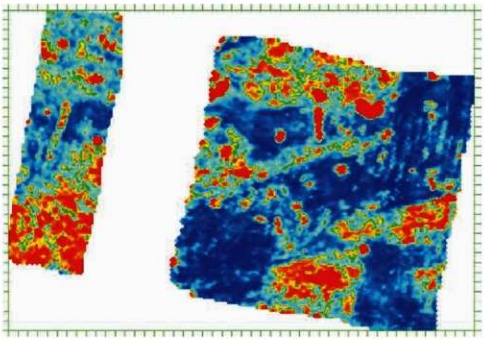


第 10 図　平成 30（2018）年度の探査結果②

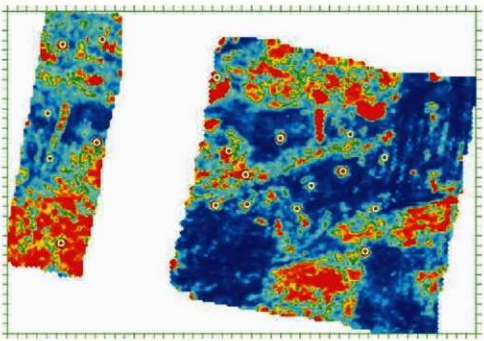
⑷　平成 31（2019）年度

平成 29 年度範囲の西側南半、平成 30 年度範囲の南側に隣接する 3,694㎡である。甲冑が出土した 21 号墓、62 号墓、76 号墓を含む数多くの地下式横穴墓が発見、調査されている範囲である。

第 11 図は、地表下 0.5m から 1.93m までのオーバーレイ解析の結果である。地下式横穴墓あるいは類似遺構の可能性が高い地点 19 ヶ所が認められた（第 12 図）。



第 11 図　平成 31（2019）年度の探査結果①



第 12 図　平成 31（2019）年度の探査結果②

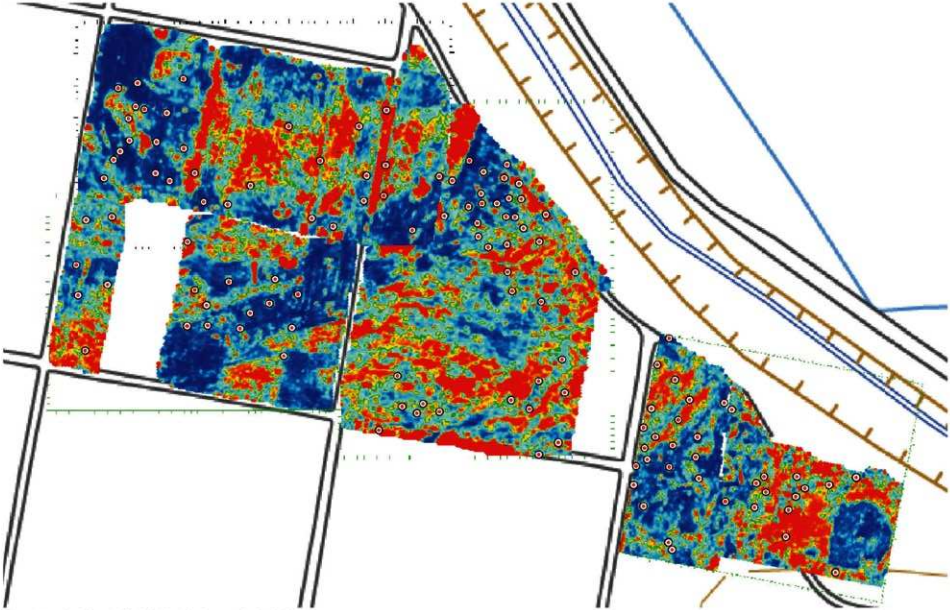
4　島内地下式横穴墓群の地中レーダー探査の成果（まとめにかえて）

4ヵ年にわたる地中レーダー探査の結果をまとめたものが第13図である。探査を実施した総面積は18,631㎡、アンテナの走査距離は37,262 mに及んだ。そして、地下式横穴墓あるいは類似遺構の可能性が高いと思われた地点は124ヶ所となった。これには、過去に発見、調査されたものの一部も含まれていると思われる。

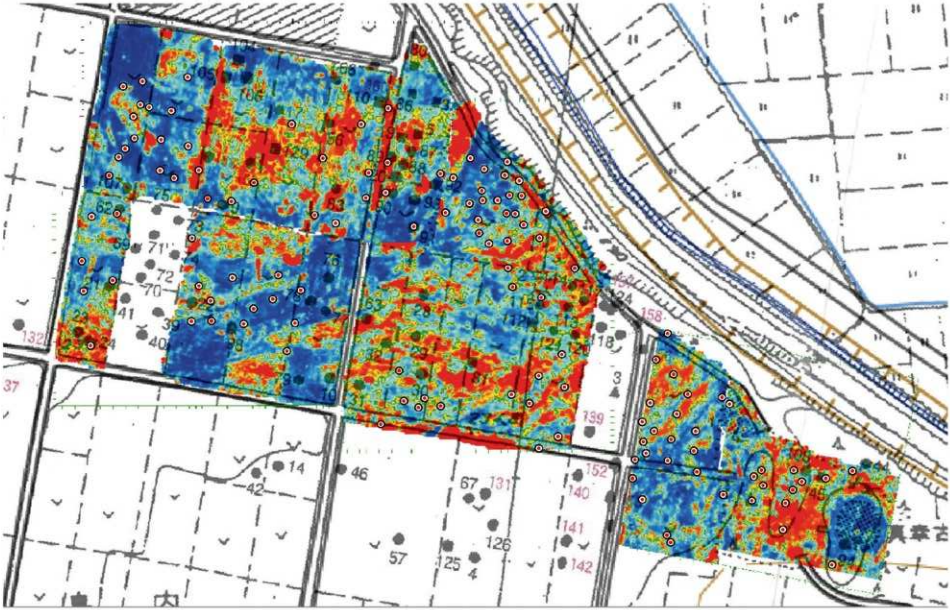
これに過去に発見、調査された地下式横穴墓や板石積石棺墓の分布（図中の黒いドット）を重ねたものが第14図である。過去に発見、調査された地下式横穴墓や板石積石棺墓と、今回の地中レーダー探査によって新たに確認された地点を合わせると、多少の差はあるとしても非常に高い密度で分布していることが指摘される。

また、過去に発見、調査されたもの（黒いドット）と、今回の地中レーダー探査で指摘された地点（白地に赤のドット）が重なっている、つまり過去に調査された遺構を地中レーダー探査で捉えたものは意外にも少なく10ヶ所程度である。これは、過去の調査事例のほとんどが陥没による不時発見であり、緊急調査後は安全対策のために天井部を落とし、土を充満して埋め戻されたことに起因しよう。また、調査後に大型農業機械によって深耕され攪乱された場所も見られる。

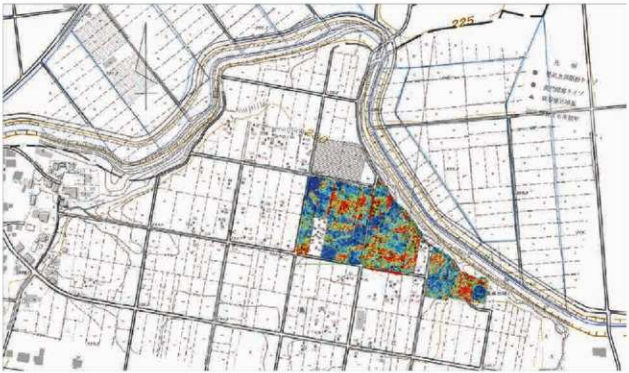
地上からは直接的に視認できない潜在遺構である地下式横穴墓群を、全域ではないものの、分布の中心域と思われる18,000㎡以上で面的に地中レーダー探査を実施し、潜在遺構分布図である地下マップ（第15図）を作成できたことは画期的であり、今後の調査研究、遺跡の保全等に大きな役割を果たすものと考えられる。



第 13 図　島内地下式横穴墓群の地中レーダー探査結果



第 14 図　過去の調査遺構分布と地中レーダー探査の結果



第 15 図　島内地下式横穴墓群　地下マップ

写　真　図　版

ST-174　調査地遠景（南から）

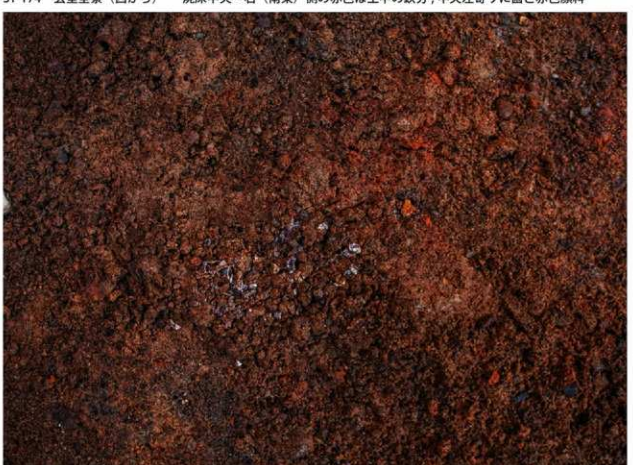
同　調査地近景（南西から）

図版２

ST-174　完掘全景（南東から）

同（西から）　玄室北半部

ST-174　玄室全景（西から）　屍床中央～右（南東）側の赤色は土中の鉄分，中央左寄りに歯と赤色顔料



同　崩壊歯と赤色顔料（南から）

図版 4

ST-174　竪坑埋土と土塊閉塞状態（南東から）

同　土塊閉塞状態（南東から）

ST-175　完掘全景（西から）

同　（東から）

図版６

ST-175　玄室内（北から）

同　２・３号人骨と羨門板石閉塞（南から）

ST-175　１・２号人骨　上半身（西から）

同　東裾部～東壁　掘削痕（西から）

図版８

ST-175　３号人骨頭部と西壁掘削痕（東から）

同　１・２号人骨下半身と３号人骨上半身（東から）

ST-175　２号人骨頭骨下の刀子と貼床確認サブトレンチ（西から）

同　刀子　出土状態（西から）

図版 10

ST-175　羨門板石閉塞，貼床確認サブトレン

図版 10　ST 175
羨門板石閉塞
貼床確認サブトレンチ（南から）、羨門板石閉塞状態（南から

同　羨門板石閉塞状態（南から）

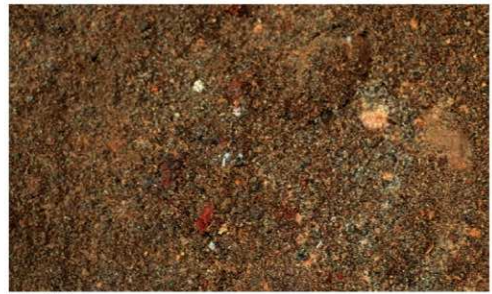
ST-176　完掘全景（東から）

同　（西から）

ST-176　玄室　北中部　赤色顔料の広がり（南から）

同　1号人骨頭部と刀子（北東から）

同上　接写



同上　接写

ST-176　東半部　刀子３点　出土状態（北西から）（左下から奥へNo.４・３・２）

同　羨道土塊閉塞状態（北から）

図版 14

ST-177　完掘全景（北東から）

同　1号人骨と大刀，左裾部（西壁）～羨門板石閉塞状態（北東から）

ST-177　1号人骨と副葬品（北東から）

同　俯瞰

図版 16

ST-177　1 号人骨　上半身（北から）

同　推定第 2 被葬者の赤色顔料と副葬品の刀子（南東から）

ST-177　羨門板石閉塞状態（北から）

同　貼床確認サブトレンチ　中央付近

図版 18

ST-178　完掘全景（北から）

同　俯瞰

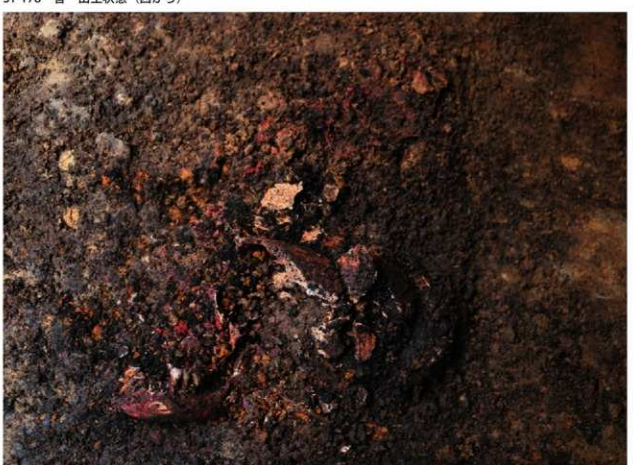
ST-178　1・2号人骨と副葬品

同　2号人骨上半身とその周辺（北から）

ST-178　1・2号人骨　下肢とその周辺（北から）

同　1・2号人骨　頭部（北から）

ST-178　箸　出土状態（西から）



同　2号人骨　頭部（北東から）

図版 22

ST-178　3号人骨の赤色顔料と仕切り土手の上に刀子（東から）

同　2号人骨右足部の鉄鏃　出土状態

同　大刀に接する刀子3本　出土状態

ST-178　右裾部（北西から）

同　羨門板石閉塞状態（北から）

図版 24

ST-179　耕耘機による破壊，通報時の状況（南から）

同左　接写（南から）

同　2 m四方の表土除去（北から）

同左　接写

同　竪坑　検出状態（北から）

ST-179　竪坑　検出状態（西から）　　板石は 25cmほど東へズレて落ちかかっている

同　竪坑断面（西から）

同上　北側　接写

同上　南側　接写

図版 26

ST-179　閉塞板石２枚と目貼り粘土（東から）

同　最下板石と目貼り粘土（西から）

同
目貼り粘土
検出状態
（西から）

同上
（北から）

ST-179　大腿骨と奥壁～北西壁

同　東裾部の白色粘土～天井の掘削痕

同　竪坑　開口部　掘削痕

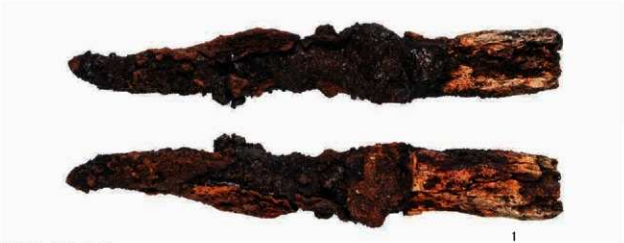
同　羨道天井　掘削痕

ST-179　玄室　西半

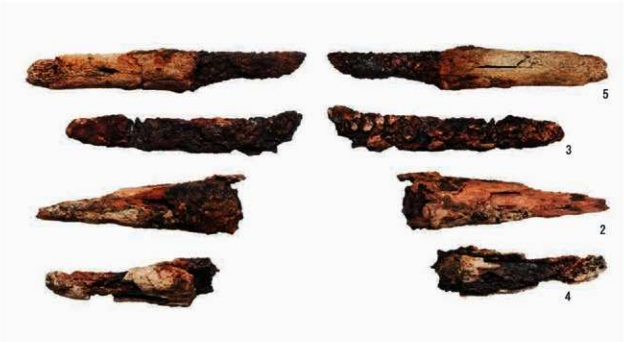
同　東半

ST-179　大腿骨出土状態（西から）

同　1・2号人骨の大腿骨

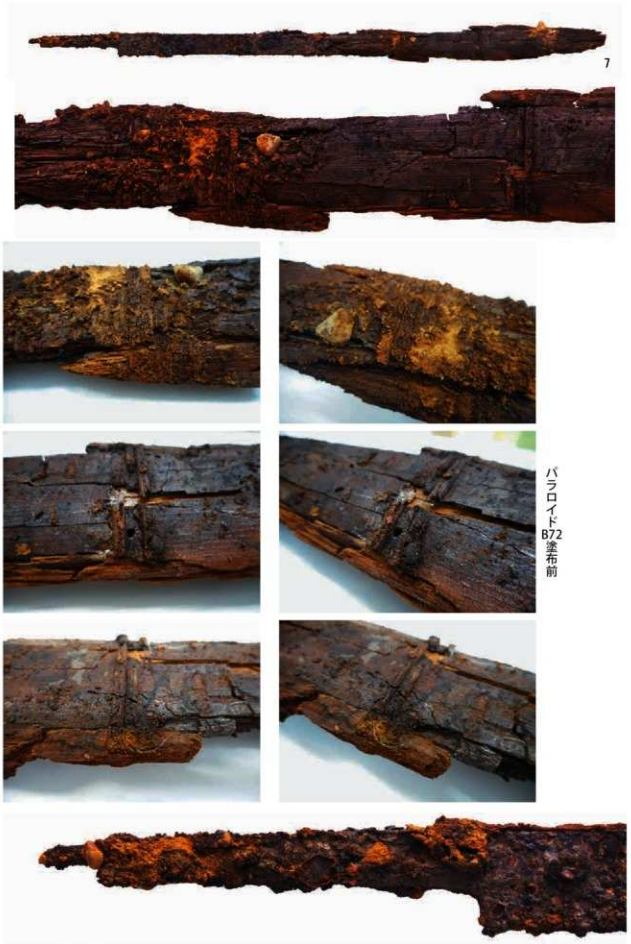


ST-175　出土　刀子

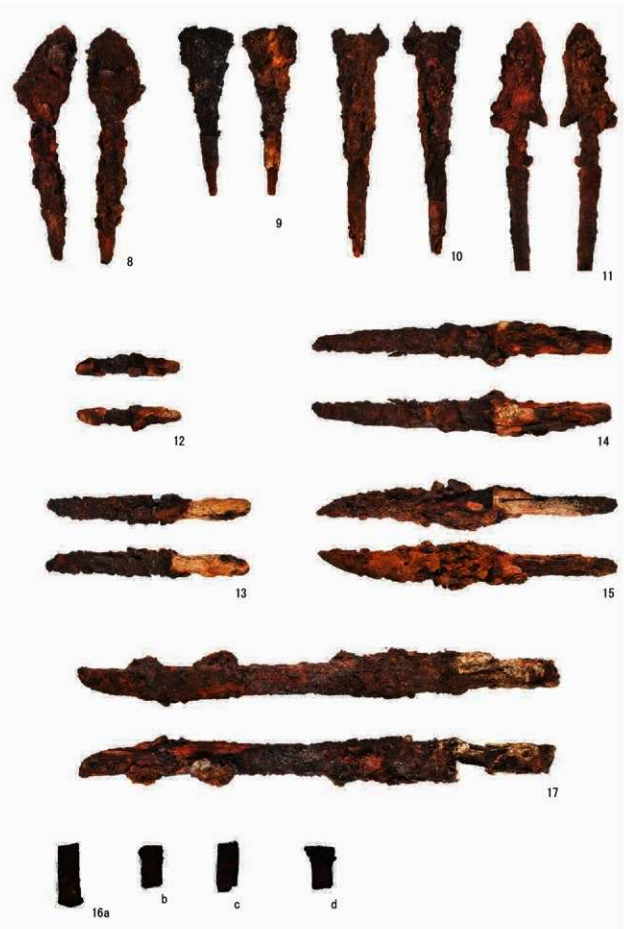


ST-176 出土　刀子

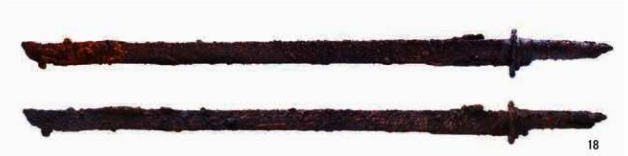
ST-177 出土　刀子



ST-177　出土　大刀



ST-178　出土遺物（1）



パラロイド B72 塗布前

ST-178　出土遺物（2）

図版 34

ST-178　2 号人骨右足除去後　鉄鏃出土状態

ST-178　鉄鏃（9）布痕

ST-176　刀子（3）ハエ囲踊殻

報　告　書　抄　録

ふ り が な	しまうちちかしきよこあなぼぐん
書　　名	島内地下式横穴墓群Ⅶ
副　書　名	埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	えびの市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第64集
編 著 者 名	竹中正巳・橋本達也・東憲章・加藤徹・中野和浩
編 集 機 関	えびの市教育委員会
所　在　地	宮崎県えびの市大字栗下1292
発行年月日	2024年3月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
島内地下式 横穴墓群	えびの市大字島内字 平松・杉ノ原	9	1001	2019.8～ 2023.6	24㎡	畑耕耘 陥没

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
島内地下式 横穴墓群	古墳	古墳	地下式横穴墓	鉄刀・鉄剣 鉄鏃・刀子 貝釧	大刀装具の遺存状態が良好

えびの市埋蔵文化財調査報告書　第 64 集

島内地下式横穴墓群Ⅶ

令和６（2024）年３月 22 日

編集・発行　えびの市教育委員会
えびの市大字栗下 1292

印　　刷　株式会社 大口新生社印刷
鹿児島県伊佐市大口大田 2319-1